

# 「子どもは学校放送番組をどこまで読みとれるか」

## －科学研究費成果の公開シンポジウム－

生田孝至（新潟大学）、水越敏行（関西大学）、木原俊行（岡山大学）

松井仁（新潟大学）、前野公彦（NHK）、中野照海（ICU）

赤堀正宜（桐蔭学園横浜大学）、小町真之（東京情報大学）

### はじめに

本報告は、科学研究費補助金による「映像の構成と視聴能力の発達に関する研究」（基盤研究(A)1）の平成8年度の研究を中心に1996年12月14日にシンポジウム「放送と映像をとらえる」を開催し、その成果を一般に公開した研究発表の記録である。この研究では、平成7年度は映画「裸の島」を素材に取りあげ、平成8年度である本年度は日本賞候補番組NHK制作の「動物のたんじょう」を取りあげて、小学生から中学生を対象に視聴能力を調査してきた。調査結果はおおむね、映像視聴能力の発達を支持するものであった。これらをもとに、研究者、番組制作者、番組構成の専門家などにより、映像や視聴能力について公開シンポジウムの形で論議し、課題を検討した。シンポジウムは1部と2部に分けて行われたが、紙数の都合で、1部のみを掲載した。

### 1. 映像視聴能力研究の背景と目的

水越 敏行

生田孝至：

映像視聴能力というものを対象にして、その発達を研究するメンバーとして、科学研究費をいただき去年、今年、来年の3か年に渡る研究をしておりまして、その研究成果をもとにしまして、今日は、科研のメンバー及び研究協力者

でパネルディスカッションということを企画いたしました。多少専門的なところに入ることもあるかもしれませんがよろしくお願ひしたいと思います。

第1部の方は、関西大学の水越先生の司会のもとで「子どもは学校放送番組をどこまで読みとるのか」というテーマで進めさせていただきます。

それでは、第1部の司会の水越先生にお願いしたいと思います。

水越敏行：

ただいま、ご紹介いただきました関西大学の水越と申します。第1部の方の司会を務めさせていただきます。

実は、今日のご発表いただく方々は、第1部の場合はですね、この新潟大学の生田先生を始め松井先生、本学の先生にご発表いただくのは当然として、岡山大学の木原先生、これは一緒に科学研究費を、生田先生を代表にして頂いておる科研のメンバーでございますが、その他に、今日はわざわざNHKの大阪から、前野さんにきていただきまして、実際にこれからみなさん方に見ていただく番組の制作者でありまして、昨年度の日本賞文部大臣賞をとった番組について、私はこういう立場で作ったんだということを説明していただく、それを受けて研究者たちが、それを使った番組の調査結果を報告し、そして、それを赤堀先生がコメンテーターとして

来ておられますのでご意見をいただいて、その後フロアのみなさんと、いろんな質疑応答をしてというような、そんな順序で第1部は進めたいと思っております。

### 映像リテラシーをとらえる

この研究をスタートさせたいきさつをですね、私もメンバーの一人ですので、簡単に申し上げてみたいと思います。リテラシーという言葉は読み書きをする能力ですよね。ま、今でも、もちろんリテラシーといえば読み書き能力のことを言うわけで、文字を読んだり、書いたりすることができないのをイリテラシーというような言い方をして、一人でもそういうイリテラシーの人をなくそうというような世界的な運動がおこっていることもご承知だと思います。ここで私たちが問題にするには、文字を読んだり書いたりする意味でのリテラシーではなくて、映像のリテラシーあるいはメディアリテラシーと、こういう新しい意味でのリテラシーの使い方というのは、いったいどういうことかと言いますと、映像を使って、それを相手に伝える、映像で表現する、あるいは映像を読みとる、映像を読解するといえますか、映像の中身を映像を見て理解する、映像を使って表現する。その他いろんな機器、CD-ROMとかあるいはビデオの編集とか、そういう意味での映像的なものをとりこんだような、マルチメディアパソコンやテレビ、ビデオを具体的に操作する、使う、そういう使うとか作るとかいった意味で、映像というものを使い込む能力を育てたいと、育てるべきだ、これはもう小学校から大学まで、今のようマルチメディア、多メディアが出てくる時代にはそういう能力が必要なんだ、こういうことを言われておるわけなんです。

で、その中で、今私が映像を使うとか、読みとるとかっていういろんな言い方をしましたが、その中で最もベーシックなものは何かというと、やっぱり映像をきちんと読みとる力だろう、それがないと、なんか、すぐに映像で表現したいという気持ちを持ちがちですけれども、きちん

と映像を読みとる力のない人が、映像を使って表現するとなんかわからせたつもりでも、相手に全然伝わらないというようなことがありますね。これは文章だって、きちんと文章を読解できるということがもたになって、文章で表現するとか、相手に伝えるということが出てくるわけです。どうも今の世の中、逆立ちして、表現ということだけが先に走ってしまうということへの批判の気持ちを多少持っております。

そうすると、映像を読解するというこれは昔から読解という形でですね、今日もおみえのICUの国際キリスト教大学の中野先生始め、ずっと視聴覚教育学会、放送教育学会で、やってきたわけですが、その中でですね、私どもも映像を読みとることをどうやったらいいかを研究してまいりました。

### 映画「裸の島」の研究素材の意義

これは生田先生が前に松下視聴覚教育研究財団で頂いた助成金とか、私どもの科研でずっと続けてやってきたんですが、最初はですね、「裸の島」という新藤兼人という、これはまだ現役で作品をたくさん作っておられますが、新藤さんのですね、「裸の島」昭和35年の白黒映画なんですが、これを選びましたね、前には。なんで選んだのかというと、これはですね、今ちょっとここに書きましたけど、白黒映画であると同時にセリフがないんですね。セリフがいっさいない。登場人物で彼の奥さんで、この間亡くなった乙羽信子も出ているんですが、いっさいセリフがない。最後の場面で彼女が泣き叫んで草をむしっていくところだけ声が入るんですが、風の音とか、水の音とか、魚を釣り上げた音はあるけれども、セリフがない。ということはですね、映像を読みとれないとセリフがありませんから、物の音、魚の音はあるんですがセリフがないんですから、言葉でコミュニケーションしていませんから、映像が読解できないと、この名映画を鑑賞できない。これはモスクワでグランプリをとった名映画なんですが、世界各国にこれが売れに売れたんですが、売れたって

いですよね、これはセリフの吹き替えが何もいらない。ですから、スーパーインポーズなどする必要がない、セリフがないんですから。もちろんこれはとうきの映画なんですけれども、彼はセリフを使わなかった。

これを38分に編集して、2時間ぐらいの長編なんです、これを38分に編集したものを見せて、その後に視聴能力の調査をやったと。だから、映像の読みとり、順序とかっていうものをいろいろやりましたが、例えば、これから先番組はどうなっていくのかというような先読みをさせたりですね、あるいは映像の吹き出しの写真を見せて、この登場人物はなんて語っているのだろうかとセリフを書き込ませるとかですね、いろんな形をしてその番組の理解を図ったわけです。

### わくわくサイエンスの特徴

これをやりました後を受けてですね、今度発表いただくような、今度は「裸の島」に変わる「わくわくサイエンス」の「ハムスターのたんじょう」という学校放送番組を使っているわけですね。ですから、同じ映像でも、この新藤さんの「裸の島」とは非常に違うということは明らかです。ただ共通点があるんですね。なければ「裸の島」というのに引き続いて、今度はテレビ番組にあるということをやって、2つの間に断層ができてしまったら研究にはなりませんから。

その連続面だけを私は1つ申し上げてみたいんですが、1つは制作者の意図が明確に読みとれるということですね。これはどういうことかと言いますと、新藤さんの場合はですね、新藤さんの岩波から出ている何冊かの大きな本がありますが、その中で「裸の島」というのはいったいどういう気持ちで作ったのか、そのシーンは、それから、ここの場面でこういうふうなことをさせることによって、後の場面を盛り上げるとか、ということもございますし、それからこの「裸の島」でなぜセリフを入れなかったのか、あるいは、最も象徴的な場面は労働という

こと、その労働というのは、天秤棒で水をつぎ上げるシーンのその天秤のしなりの中で、たわみの中で、労働ということを象徴していくんだとか、きちっとそのシーンのごとに彼の解説が出ている。何のためにこの場面を入れたかということが明確に読みとれるので、それによって我々が問題を作って、子供たちの読みとったものと新藤さんのねらいとが一致しているかどうか、こういうことがはっきりできたということですね。

今度の学校放送番組の場合も、前野さんを今日もそのためにわざわざおよびしてきていただいたわけですが、制作者の意図というのが明確です。どうしてこの番組を作ったのか、何をモデルにしてこれを作ったのか、なんでこういうようなシーンをあえて入れたのかということをご本人に、私、生田先生、木原先生と一緒に前野さんが東京におられるときに東京のNHKまで質問しに行きました。今年の夏やったのですけれども、制作者の意図が明確であるということは、調査をしていく場合に非常に大きなことである、と。こういうふうに思います。

それから非常に優れた映像である、これは言うまでもない。「裸の島」はモスクワでグランプリを取っているし、いまでもなお、ビデオディスクにして、手に入れようとする人が跡を絶たない名作中の名作ですね。昭和35年、1960年のあの激動の時代における、乙羽信子、新藤兼人というコンビが作った映画は1つの日本を象徴しておるということですね。

今度の前野さんの場合は、昨年の日本賞を最後まで争った名番組でありまして、これを審査したときの、初等審査部門の審査委員長はスリランカの放送部長でしたが、おそらく次にしばらく出ないだろうというぐらいの名作だと、しかも途上国が明日からでもやれるぐらいの番組だということを言ってですね、彼が激賞した番組でありまして、私も審査員の1人でしたが、深く感動した名番組でした。そして、これを扱って実際授業もなされておると、そういうふうな制作者の意図がはっきりしておる優れた映像で

あります。

それから同時に基本的には言葉での伝達表現というよりも映像の読みとりということを、そういう質問肢を作りやすい番組であったと、映像段落なども非常にはっきりしておりますし、ある程度映像の読解がしやすいというような、こういう点で両方とも共通している。前に「裸の島」でやった質問肢をアレンジして、変更して、修正して、追加してやっても基本的には同じものが使えるということを私どもは判断しまして、それをかけていった。最後に実は、5年生、6年生、中学生というかたちで、私たちは小中にわたる追跡調査をやって、金沢大学での教育工学会でも発表いたしましたし、それからその前の時は、十文字で発表して、そして金沢というふうにして、2回発表をやってきましたが、小学校から中学校、今度また新たに生田先生は、もう一つ階を下げようとんで小学校3年生のデータも今回は新しく取り込んで、小学校3、5、6、中学というような発達段階によって映像を読みとるという基本的な能力はどのところに節目がある、発達の節目がどの辺にくるのであろうか、読みとるといっても、読みとる能力のどの要素については節目がある、どの能力については節目がないのかということを小3から中2にかけて、学年何百というかなりのデータをとって調査をした。それを発表していただく。そういうことが今回の、前回金沢大学で発表した、この11月の後に、もう一度さらに小3をとっているようなことも含めてご発表していただきたいと思います。

ちょっと長くなって申し訳ございませんでしたが、そんなことでただいまから内容に入りますが、くどいようですが、順序としては番組を見ていただいて、前野さんのコメントをいただいて、それからあと研究者の発表が続く、こういう順序でやりたいのでよろしくお願いいたしますと思います。それでは今からビデオを見ていただきたいと思います。

(「わくわくサイエンス」のビデオが流れる)

水越：

どうもありがとうございました。ただいま「わくわくサイエンスー動物のたんじょうー」その番組を全部見ていただいたわけですが、15分の番組です。学校放送番組ですから。それでは、これを作られました前野さんのほうから、少しコメントをいただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

## 2. 「わくわくサイエンスー動物のたんじょうー」の制作意図

前野 公彦

前野公彦：

NHK大阪におります前野といいます。東京に5年間おりまして、現在は大阪に移りまして、5年間ずっと学校放送「理科」をやってきました。もう2年前に作った番組だったので、今、なんか懐かしいなあと思いながら見ていました。逆にどなたかに感想を聞いてもいいですかね。

水越：

感想を聞いていただいて結構ですが、前野さんにその番組を作るときに何をねらって、とかそういう基本的なことを言っていただいて、それから感想を聞いていただきたいと思います。

### 番組制作の意図

前野：

5年生の理科の動物のたんじょうという単元に合わせて、放送を作って、そういうことです。ねらいとかも決められておりまして、生命誕生のしくみを伝えるということが1つ、それから、生まれたその生命がちゃんと育っていく、月並みの言葉なんですけど、本能、本能なんてあんまりいい言葉ではないんですが、そういった能力が備わっていることを知る。あともう1つはオス、メスの役割ですね。動物にはオスとメスがいて、役割が違うか、共同で生命誕生にお互い参加する、とこの3点ですね。この3点を伝えるということが当初から決まっておりました。

で、この3点をどうやって子どもに伝えるかと、そこから先を考えることが僕らの仕事です。いろんなことを考えました。例えばですね、NHKには動物の誕生の映像なんてもう腐ほどあります。ライオンの出産もある、キリンの出産もある、動物園で生まれたものから、アフリカのサバンナであのボテッと生まれ落ちる、いろんな映像があります。ただ、今回あえて、ハムスターというのにしたのは、なんと言いますか、子どもなんかは野生動物の番組をどうも好きらしくて、たくさん見ておられるようなんですが、どうも野生動物、もしくは大型動物ですと、やっぱり親近感がわからない。興味本位で、あっおもしろいものを見たで終わってしまう。

これではいかなのじゃないかなとまず思いまして、次に考えたのが、イヌ、ネコ、ウサギ、でハムスター、この4つのうちのどれかにしようと考えました。というのは大型動物ではやはりこう親近感がわからない。せっかく動物が誕生してもですね、ちゃんと理解してもらえないんじゃないかと。かといって、カブト虫なんか、子どもがよく飼っていて好きですが、カブト虫でもやはり親近感がわからない。じゃあ何かというと、いわゆるほ乳類のペット類ですね。イヌ、ネコ、ウサギ、ハムスター、この4つじゃないかと。

その中でもイヌ、ネコは飼えない。マンションのお子さんはいっぱいいますから。ぜひ、番組を見終わった後、私も飼ってみたい、私もオス、メス一緒に飼って子どもを生ませたいって思った子が実現できるように、となるとイヌもネコもウサギもだんだん難しくなって、ハムスターしか残らない。ということで僕はハムスターを使いました。

「ハムスターのたんじょう」で用いた映像技法で、その先ですね、難しいのはその、ハムスターという小動物にすると、子どもが飼育するという立場では簡単なのですが、今度撮影する側とすると非常に難しくなしまして、胎児の様子をどう撮るのかという、これがまた難しくなっ

きまして、今回MRIで160枚スライス、MRIという断層写真を撮る、人間の脳なんか見る機械がありますが、それで160スライス撮って、それをNHKスペシャルの「人体」という「人体2」という番組があったのですが、脳のですね、素晴らしいCGを作った番組があったんです。

その時のプログラムが残ってましたんで、コンピュータプログラムが残ってましたので、160スライスのデータを3次元CGにすると、これに半年ぐらい、いや4か月ぐらいかかりました。なぜ4か月もかけたかと言いますと、それはやはり、おなかの中の赤ちゃんが生きているんだということをなんとかして伝えたい、その生まれる生命誕生の瞬間というのは、これは、あのオギャーと生まれでてきた、これは子どもにも、映像で撮るぶんにも簡単です。伝わりやすいですね。

ただおなかの中にいる段階で、子どもにどうやって、このおなかの中に生きている赤ん坊が何匹も入っている、これをどう伝えるかということがやはり非常に難しく、解剖しちゃえば中は見えます。でも解剖すると、ものとして、母胎をものとして見る癖が子どもについちゃう。そういう姿勢までが伝わってしまいますのでどうしても解剖はしたくなかった。ただファイバースコープつつこむにしても、なんせ相手が小さすぎて、ファイバースコープだめ、X線にも写らない、ま、ぎりぎりの選択でこれが世界初めてだったのですが、ハムスターの胎児を母体ごとそのまま生きた状態のままで撮る、ということをおなかがんばってききました。

### 「ハムスターのたんじょう」制作での動物の生死観

その子どもが生きてるうんぬんを、なんでこんなにこだわっているかというところでですね。その前にちょっとした調査を東京都の教育研が行いましてですね、植物の種は生きているのでしょうかと、その調査をした。その調査結果を発表前に僕はもらってたんです。種は生きていると答えている子どもは非常に多かったんです。じゃ

あ、スーパーで売っているフルーツ、あれは生きていますか、フルーツの中に種が入っていますよね、食用のフルーツですね、スイカでもいい、ブドウでもいい、なんでもいいんです。ああいうスーパーに並んでいる食べ物の種となると、軒並みみんな死んでいる、こう答えるというんです。

死んでるはずのそのフルーツの種も、土にまいて水を与えるとどうなりますか、とこう質問すると、今度は、子どもはまた芽が出ると、こう答えるんです。つまり、じゃあ改めて聞きます。スーパーに並んでいるフルーツの種は生きているのですか、死んでいるのですか、と改めて聞くと、ああいう食べ物の種は死んでいるんだと。ただし、土にまいて水をかけると生き返るんだと。こう言う。生死感がですね、一度死んだものが、水と土というアイテムをとると、ライフゲージが復活すると、そういうコンピューターゲームの世界がそのまま子供たちに浸透しきっている。そういうことを事前に知ってたもので、これはいかなのじゃないか、つまり、オギャーと生まれる前の胎児はちゃんと生きているんだ、これをどうしても伝えたかった。

あとは、教科書とは離れる部分ですが、まっ、離れないかもしれない。生命をいつくしむという心、という部分でこの子どもですね、子役を起用したということと、およびそのナレーションを、通常のナレーションではなく、子どもの飼育日誌の朗読というスタイルでやった。ですから、変なナレーションいっぱいあります。赤ちゃんの大きさはさくらんぼぐらい、こんなナレーション普通つけないですね。何センチぐらいというんですが、さくらんぼぐらい、わざと子どもの朗読ふうのナレーションをつけています。また、今日はリスになりました、あんなナレーションもおかしいですね。おかしいですが、わざと考えてやっています。あれも自分でベッドを作るっていう母の知恵の部分伝えるために、ストレートではないのですが、リスになりました。子どもらしさをねらってつけたナレーションです。日誌ふうのナレーションですね。

そういう様々な努力をして、生命感というのを出そうとしました。

ただ今をもって思うのは、1点だけ伝えることができなかったのは、お父さんの役割。オスの役割が、これだけはやっぱりちょっと伝えきれなかったと思いました。そこはただ、教室にお願いしようと思って、ねぎってしまったところです。以上です。

## 動物の成長過程の短縮

### 水越：

どうもありがとうございました。いろいろとまたご質問があらうかと思いますが、あとまたコメンテーターの小町先生もお見えいただきましたし、赤堀先生と2人でいろいろとご感想をいただく、それからディスカッションの場面でみなさんがたからいろいろとですね、ご意見をお伺いしたいと思います。最後に一つだけ、私から前野先生へお願いいたしますと、実際の撮影は5日間と言われましたよね。そうすると、16日間か17日間ぐらいかかっているハムスターを5日で撮るのは、どういうことを工夫されたわけですか。それだけちょっと。

### 前野：

はい、この番組で、80匹のポッポちゃんが登場していて、1カット1カット、全部ポッポちゃんが違います。80匹のハムスターに8つの水槽、トンネルを用意して、NHKのスタジオ内で撮影しました。従って、各ステージの母体を用意したということで、5日で撮影が終了しました。

### 水越：

ということだそうでございます、ポッポちゃんが80匹もいたということは、私もとんでもないことだと思いますけれども、撮影を5日間で仕上げなきゃいけないということの中で、そういう作り方をなされたこと、にもかかわらずおなかの中の子どもを写すのに4か月かかったというのも、そのへんのところもなかなかおもしろいことだと思いますが、そういう点も参考に

なさって後でお聞きしたいことがあれば、いろいろと聞いていただきたいと思います。前野さんどうもありがとうございました。

それでは時間がせまってまいりましたので、次にうつりたいと思いますが、子どもは日本賞候補の番組、NHKの動物のたんじょう、これを実際に学校で見せました。3年生から中2まで、彼らはこれを、どう見て私どもが作った調査用紙にどういう情報をのせてくれたのか、分析して、どういう結論を出したのか、研究のさわりの部分になるところを新潟大学の生田先生と岡山大学の木原先生、そしてそれについて、今度は少し角度を変えて新潟大学の松井先生、こういうお三方にご発表いただきたいと思います。それではどうぞ。

### 3. 研究の枠組み

木原 俊行

木原俊行：

私達2人で調査研究の概要と、そして、結果として、今のところわかっていることをお伝えしたいと思います。

今、前野さんの方から番組に対する紹介をいただきました。大変いろんなことを言われたと思うんですね。私達自身もこの番組を題材にして、映像視聴能力の研究をしようと思ったときに、本当にいろんなことを勉強しなければいけなかったんです。今、最初に水越先生の方から、この映像視聴能力の研究は優れた作品を使っているんだと、しかも映像中心であると、そういうふうなコメントがあったと思うんですけれども、優れた作品であればあるほど、やっぱり、調査用紙に直しにくい、料理しにくい部分っていうのはたくさんあるように思います。また、映像中心ということも、今の様々なコンピューター等の装置を利用しても、なかなかこううまく表現できない部分があって、大変苦労しました。そこで、私の方では、優れた作品を料理していく、ちょっと失礼な言い方かもしれませんが、調査に直していくときの私達のとりくみ、

そのプロセスと、それから、では実際にできた調査のどこにそれが表現されているのかということをお伝えし、そして、作った調査に子どもがどう答えてくれたのかというのを、生田先生の方でご紹介いただくというふうにしたいと思います。

先生方の資料の中に、「シンポジウム、子どもは学校放送番組をどこまで読みとれるか」というタイトルのA4サイズの資料があると思います。それから調査用紙の抜粋になるんですが、同じくA4のサイズで横型で、2番から始まっている、ちょっとコピーで見にくくて申し訳ないんですが、調査用紙が入っていると思います。これ、もともとはA3サイズです。部分的にそれを利用しながらやりたいと思います。

### 作品の意図の把握

まず最初に言いましたように、この作品を題材にするにあたって、ちょっと字が小さくて申し訳ないんですが、どうやって制作者の意図にせまっていくのかということを、研究の課題というとおおげさですけども、私達、壁としてもちました。つまるところ、制作者の方のマインドというか、心というかそういうところに、世界の違う私達がせまっていくことは大変難しく、簡単に言うとしばらく前野さんの追っかけをやってみました。これをちょっとごらんいただきたいんですが、まっ1つには、日本賞の文部大臣賞をとられたということで、前野さん自身が自己評価なさった記述がありまして、これ、雑誌「放送教育」というものなんですが、そこに受賞に際してのコメントがあって、それを1つの参考にしました。あるいは、水越先生の方で前野さんと一緒に外国に行かれる機会があって、これ、動物の誕生に対する報告会のようなものだったと聞いておりますけれども、ここでさらに詳しい資料、1番よりも詳しい資料というのをちょうだいすることができました。その資料になると、今、前野さんがおっしゃっていたこともずいぶんのっていたような気もいたします。でも、それでもまだ、この番組の全容が

わかったわけじゃなくって、これはしょうがないということで、水越先生、生田先生、木原の3人がうちそろってですね、NHKにおしかけてしまって、1時間ほどインタビューをさせていただきました。

こういうプロセスをふまえ、さらにはつけ加えるそうですね、生田科研に申し訳ないことをしたと思うんですが、ハムスターの研究だとか、ハムスターを用いた性教育の指導資料だとかそういうものを買いたって、みんなで回し読みをして、少しでも前野さんが下調べをした状態と同じものにせまられるようにというふうなプロセスもふんで、インタビューに出かけていきました。で、こういう試みをする中で、この番組が例えば、もちろん5年生の学習内容としては、生命誕生のしくみ、プロセス、ストラクチャー、そういうものを追っているということがわかる、このあたりのことは予想していましたが、例えば、出産に至る母親の苦労だとか、あるいは生命誕生の厳しさみたいなものとか、そういうところを表現しにくいんだと、そうすると映像として、そういうものを子供たちがつかんでくれないと困るし、それを測るために調査をどう作ったらよいかと、そういった課題もできてくるわけです。

ま、そういうふうにして、制作者の方になるべくせまっていくということをやっていたんですけども、今度はそれを調査に直すときにどうするのか、という課題がでてきます。例えば、子どもにどう聞き方をすればいいのかとか、あるいは、どこの部分にどれくらい量的にもりこんでいけば、学校で1時間で、調査が終わるのだろうかとかと、15分の番組ですから、小学校を一応念頭においておきますと、残り30分で、調査を終えるためにどうしたらいいのか、そのような制約もあって、私達は調査用紙を作るのにもずいぶん苦労しました。

ディレクターの方のねらいと、研究者の目と、それから学部、大学院の学生の目から見て、この番組のどこをおさえたらいいのかと、というようなこともカバーしたり、あるいは、実際に

小学校の生徒の児童の目で見てもらって、どういところが印象深いのか、なんてことも整理するという作業も続けました。ですから、制作者の方のフォローということはどうするのかということ、いろんな視野から見ていったというか、組み合わせていったということで、なんとかお手本にあるような、調査用紙になったというわけです。

### 視聴能力の構成

それでこのA4横のやつの方を見ていただきたいんですけど、本当は1番から16番まででして、一部先生方のお手元になところもあるんですが、一応2番から13番までが私達の映像視聴能力に直結する質問の部分です。2、3、4は再認、再生ということを問うています。6、7、8は既有知識の関連づけということを尋ねるものです。5番は再認、再生なんですが、作って調査をかけた後、これはどうも映像的ではないと自己反省いたしまして、分析からは削除してあります。

2枚目をご覧ください。9、10さらに3枚目の11の問題の作成の意図というのは映像による技法というものを子供たちがどこまで感じとってくれるのだろうかということを問うたものです。それから3枚目の12番と、ないんですが最後13番、13番はこの番組をつくった方はみんなにどんなことがわかってもらいたかったのでしょうか、できるだけ詳しく書いて下さい、という自由記述の問題になります。そういうのを入れて12番と13番これは番組の中心的なねらいというものが、子供たちどこまでわかるのだろうかということを尋ねるものです。もう一度繰り返しますが、再認再生、既有知識との関連、さらには技法の理解、そして主題把握、こういう4つの側面を一応映像視聴能力の窓として、設定して、ここにこめられた、例えば、映像的な工夫、あるいは制作者の方の意図、そういうのを子供たちに尋ねることになったわけです。

全部言っているともう時間がないので、一部だけ先生方に私達の取り組みをご紹介しますと

と思いますが、例えば、再認再生のところで言えば、2番に動物やハムスターやかよこちゃんの写真を入れて、名前ややったこととの対応をつけるようにしていったというところあたりは、映像をどう生かすかということを少しでも考えたつもりですし、それから3番、ポッポが穴を掘っていたのはどうやっておぼえたのでしょうか、というのは5番の生まれたときから知っていたというのが正答となるわけですが、誤答の中に本を読んでわかったという、ポッポのほうじゃなくてかよこちゃんがやっていたものを入れて、映像による偏りがあったのかということ把握するだとか、ポッポのお母さんというのは、かよこちゃんがお母さんとやりとりをしていたので、それにつられていないかどうかをみるとか、そういうふうなことを考えてみたつもりです。

あるいは既有知識の関連だと、8番のハムスターと1番近いものを選んで下さいというやつ、これは「リスみたい」というやつが最後、前野さん言われてましたね、ああいうところに子どもがとらわれていると、絵としてはネズミに似ているのに、そこのところが軽んじられる、そういうことが起こりうるのかどうかと、そういうふうに考えてみました。

2枚目をご覧ください。この絵としてはですね、交尾をしてというところなんです。この後、下からガラス水槽ごしに交尾の場面、結合の部分を映し出すようなシーンがくるわけなんですけれども、9番はそのことを問うています。先に結合シーンのほうを出しておいて、これはどこのアングルで撮ったものでしょうかという部分をもりこんでみました。このあたりは前野さんが放送教育の中に、番組の工夫として取り上げられておられたところを全面的にカバーしたつもりなんです。10番もお母さんのハムスター、ポッポちゃんのお腹が膨らんでいるというところなんですけれども、前野さんは苦勞に苦勞を重ねられて、1600枚ですか？160枚ですか、ごめんなさい。160枚の静止画が使われたというのを今日初めて聞いたんですけれども、とにかく母

親ハムスターのお腹がこんなに膨らんでいるんだということを、実際に撮って、それをうまく組み合わせられて作られたわけなんですけれども、ハムスターの模型と勘違いするだとか、ハムスターの絵なんじゃないかとか、実物じゃないものとして見てもらっては困る、大変苦勞なされたのは実際のものを写し出そうとしたから苦勞なされたわけで、そのへんのところを子供たちがちゃんとつかんでくれるだろうか、このへんをなんとか聞いてみたいと思って設定した項目です。

1つ1つ言えばもうきりがありませんけれども、このようにして、制作者の方の意図、これできるだけもりこんだ調査用紙をつくりたい、しかも映像というものにこだわったような調査用紙をつくりたい、そういう願いのもとで進めたものです。うまくいったかどうかというのはいろいろご意見のあるところで、後から先生方からご指導いただきたいと思うのですが、一応こういうふうにして、最初の研究のねらいというものを形にしました。それじゃあ、それが子どもがどう答えてくれたのかというところを生田先生お願いします。

#### 4. 調査結果の概要

生田 孝至

生田：

それでは簡単な結果につきましては、「シンポジウム子どもは学校放送番組をどこまで読みとるか」ということで書いたものがありますが、その結果のところに、ごくごく簡単に結果だけを書いてあります。それから、学年による比較であるとか、性別、飼育経験との関係とか、具体的な質問肢に対して学年による答えとパーセント、一番最後にそれを図表したものが配ってあるかと思います。基本的には木原先生がご説明して下さいましたが、私達は「映像視聴能力」を、既有の知識との関係、番組の再認再生、映像技法の理解、番組主題の把握、といった下位のバッテリーに分けて検討いたしました。それ

をちょっとご紹介してみたいと思います。これは総得点です。つまり既有知識も含めて、再認再生、技法理解、主題の把握、これらをトータルとして見たときの、視聴能力のトータル得点です。これが最も私達が見ようとしたところなんです。

### 視聴能力の発達差

この図(図4-1)を見ていただきますとおわかりのように、これが3年生ですね、で、5年生、6年生、中学生とこういうふうになっております。どこに差があったかというところ、3年生と5年生、それから3年生と6年生、3年生と中学2年生ということになります。3年生と5年生以上の間に、顕著な差が認められるということになります。4年生を今度は調べてみなくてはいけないんですけども、学年が上がるにつれて順番にあがるという傾向性がわかってきます。統計的に見ると、この視聴能力の極端な展開というのは、少なくともこのデータからは小学校3年生と5年生以上というところに大きな発達の差が見えてくるだろうということになります。もう少し全体を見るならば、やはり視聴能力は学年ごとにその能力が上がっている、つまり、発達の的に読みとることができると思います。

### 下位項目による検討

これを、それではもう少し下位のものを見てみるとどうなるか、ということになりますが、まず既有知識という関係で見てみたいと思います(図4-2)。この既有知識につきましては、分散分析という手法にかけますと、小学校3年生と6年生の間、それから小学校3年生と中学生の間に差が見られます。5年生との間ではちょっと図を見ると差があるように見えるんですけども、有意な差はありません。小学校6年、中学というところの違いがかなり見てとることができるだろうと思います。

次に番組の再認再生というところですが、これも小学校3年生と5年生、6年生、中学生の

間には全部差があります(図4-3)。それからもう1つは小学校5年生と6年生にあります。比較的この再認再生は、学年の間でかなり顕著に、今まではどちらかというと、3年生とそれ以降、あるいは5年生以上というふうに、大きくくくっていたのですが、再認再生を見ますと、段階的な発達の様子がこの調査から見てとることができるだろうと思うわけです。また、とりわけ私達が注目していたのは番組を作る場合に特徴的な、いわゆる映像の技法であります。先ほど、特撮の場面がありましたですね。160枚で何カ月もかかるというふうな、ああいうものがこの典型です。それから先ほど、映像を下から撮るというふうな技法もそうですが、これらが映像を作る場合、技法としては特徴的なものです。それらの理解が学年によってどの程度異なるのかを見るのがこの調査のもう一つの目的です。表をみておわかりのように、小学校3年生と5年生、6年生、中学生の間に統計的な有意差が見られました。小学校5年生、6年生、中学生の間には差がないのですから、映像技法の理解は、少なくとも本素材に限っては、小学校3年生と小学校5年生以降のところで分かれてくるといえると思います。

それから、この番組のねらいとする主題はどうであるかということです。主題の読みとりの把握はなかなか難しいんですが、先ほど木原先生が説明してくれましたように、自由記述を得点化して数量化しました。結果はどうであったかと言いますと、小学校3年生と中学校2年生の間と、それからもう一つは中学校2年生と小学校6年生の間に有意差があります。小学校5年生はわずかですが統計的には無いという結果でした。主題の把握に関しましてもこのように、やはり小学校3年生と中学生の間はありまじょうし、それから6年生のあたりとも出てくるわけで、段階的な形でこの主題把握についても発達の差が比較的良好に表れているのではないかと思います。

以上がおおよそ私の子どもが調査をしました視聴能力に関わる結果の概要です。今見ましたよ

うにテストバッテリーとして見ますと、いろいろ出てまいります、基本的には今回の場合は大きく、小学校中学年、高学年、中学生にかけて、視聴能力の発達差が出てくるということが一つ。それからもう少し、視聴能力をトータルとして見る視点とそれからもう少しこの能力を下位概念に分けて構造的に把握していく必要がどうもありそうだ、というふうな示唆を得ることができたように思います。

### 経験の影響

それから「この番組を通して、どういうことを学んだのか」というふうなことを問うてみたわけです。学年で見ると、小学校3年生がさすがにたくさんこの番組から学んだというふうなことがわかります。例えば、「交尾をして子どもをつくるということがわかった」とか「土の中にすむことがわかった」「産まれた子を親がなめることがわかった」などがあります。意外だったのは、「ハムスターを診察する医者さんがいるんだ」ということを知った中学生が予想以上に多かったことです。実際は国内で1、2件ぐらいあるだけでほとんどないわけですし、これはこの番組を作ったときにあえて作ったということらしいんです。中学生は意外にそのところをですね、「あっそういう医者さんがいるんだ」というのが多かった。これは、視聴能力の批判的能力に属するところになるわけですが、テレビなどマスコミ情報を鵜呑みにする傾向は、既有的経験や知識と関連があるようです。この調査ではハムスターの飼育経験を聞いていますが、中学生の飼育経験はあまり飼ったことがない。むしろ小学校5年生、6年生はよく飼っているわけです。飼育経験者は、ハムスターの医者はいないことは知っているのです。この経験の違いが確かにここに表れているように思われます。

先ほど申しましたように、初めてこの番組から何を学んだのかでは、交尾をして子どもを作るんだというふうなところは小学校3年生が大変よくこれで学んだところが表れておりまして、

番組制作者の意図がやはり小学校の低学年あたりでは基本的に伝わって、よく学ばれているということでございます。

大変細かくて、恐縮なんです、こういう図がございます。ちょっと見にくいんですが、縦軸のほうにはですね、この調査項目、みなさんのところにはたぶん問の2からいっているんですが、「Q2」というのがそれでございます。そこが学年によってどうであるか、今の結果の下位のところがこれで紹介してあります。例えば、1番大きく学年が出て「Q4」というのがありますが、これは質問の4ということでもあります。ちょっと見ていきますと、「ハムスターの赤ちゃんはポッポの中のどこで育っていましたか？」というところですね。これ、子宮が正解なんです、この正解率がですね、見てもらうとわかるんですが、中学生と5年生は近いんですね。ところが小学生になるとやはり正解率が低い。

こういうふうに見ていただきますと、同じく再認再生に関わるのところもですね、中のテストの下位の項目によってばらつきがでている、というふうにこれを見ていただけるとありがたいと思います。質問項目に照らしあわせると、どういう項目で学年差が顕著に出ていて、どういうところではうまくでないのかというふうなところがおわかりいただけると思うんですが、これをトータルしたものが、さきほどの学年による比較という分散分析ということでございます。

若干まとめてしましたので、子どもがここをどう読みとったのかというふうなところの詳しい内容については、ちょっと触れることはできませんでしたが、トータルとして番組をどう見ているのかというふうなところは、今言ったように3年生、それ以降というふうに分かれるのと、いくつかの項目についてはやはり発達の5年生との関係、6年生との関係も見ることができて、もうちょっと構造的なものが必要ではあるけれども、おおよそ私どもが想定した傾向が見てとれたかというふうなところでござ

図 4-1 視聴能力 学年による比較

		小学3年	小学5年	小学6年	中学2年	F値	有意差	備 考
映像視聴能力得点	平 均	10.1	11.4	11.6	12.0	43.7	0.01	小5と小3、小6と小3、中2と小3 (0.05)
	標準偏差	2.1	1.6	1.6	1.4			
	人 数	166	62	225	194			
既 有 知 識	平 均	3.5	3.7	4.0	4.0	11.7	0.01	小6と小3、中2と小3 (0.05)
	標準偏差	1.1	1.1	1.0	0.9			
	人 数	186	71	232	208			
再 認 ・ 再 生	平 均	2.2	2.7	2.8	2.9	85.6	0.01	小5と小3、小6と小3、小6と小5、中2と小3、中2と小5 (0.05)
	標準偏差	0.7	0.6	0.4	0.3			
	人 数	179	73	239	219			
技 法	平 均	2.4	2.7	2.7	2.8	13.2	0.01	小5と小3、小9と小3、中2と小3 (0.05)
	標準偏差	0.7	0.6	0.5	0.5			
	人 数	189	72	240	215			
主 題	平 均	1.9	2.1	2.1	2.3	5.9	0.01	中2と小3、中2と小6 (0.05)
	標準偏差	0.8	0.9	0.8	0.9			
	人 数	182	68	239	211			
はじめての学習	平 均	3.3	2.9	2.8	2.9	4.8	0.01	小3と小6、小3と中2 (0.05)
	標準偏差	1.5	1.4	1.3	1.5			
	人 数	190	74	242	221			

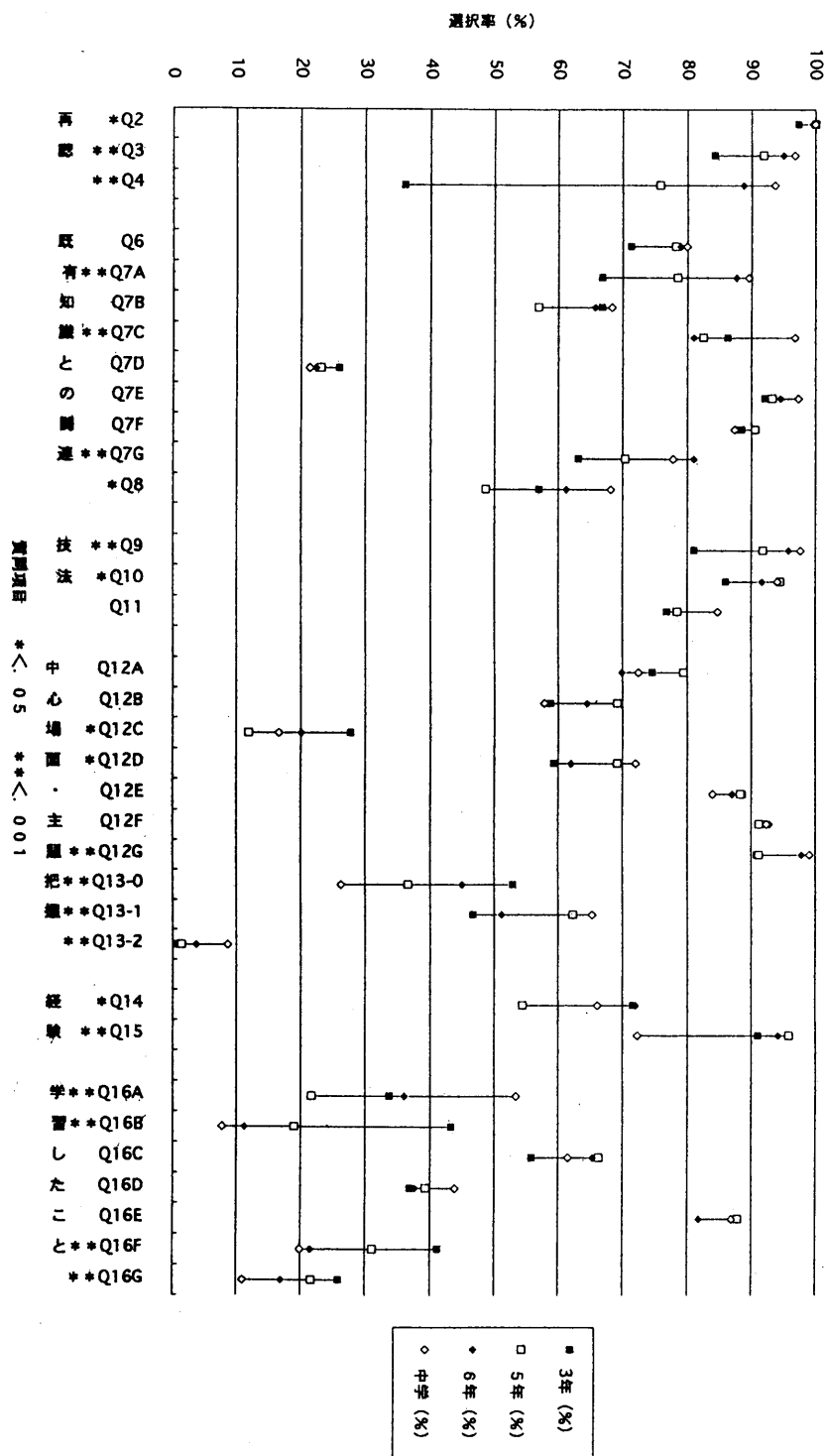
図 4-2 視聴能力 性別・飼育経験・見たたり抱いたりした経験による比較 (小3～中2)

		性 別			動 物 の 飼 育 経 験			ハムスターを見たたり抱いたりした経験		
		男 子	女 子	有意差	有	無	有意差	有	無	有意差
映像視聴能力得点	平 均	11.1	11.5	0.01	11.4	11.1	0.1	11.3	11.2	
	標準偏差	1.8	1.8		1.8	1.8		1.8	2.0	
	人 数	308	339		382	179		558	85	
既 有 知 識	平 均	3.7	3.9		3.9	3.7	0.05	3.8	3.7	
	標準偏差	1.1	1.0		1.0	1.1		1.0	1.0	
	人 数	339	358		407	193		601	91	
再 認 ・ 再 生	平 均	2.7	2.7		2.7	2.7		2.7	2.7	
	標準偏差	0.6	0.6		0.6	0.5		0.6	0.6	
	人 数	345	365		419	197		612	92	
技 法	平 均	2.6	2.7		2.7	2.6		2.7	2.6	
	標準偏差	0.6	0.6		0.6	0.6		0.6	0.6	
	人 数	347	369		422	197		616	94	
主 題	平 均	1.9	2.2	0.01	2.2	2.0	0.05	2.1	2.0	
	標準偏差	0.9	0.8		0.9	0.9		0.9	0.9	
	人 数	338	362		414	191		603	92	
はじめての学習	平 均	3.0	3.0		3.0	2.9		2.9	3.3	0.1
	標準偏差	1.5	1.4		1.4	1.5		1.4	1.7	
	人 数	355	372		428	200		626	95	

図4-3 ハムスターアンケート用紙 選択結果集計

	3年(%)	5年(%)	6年(%)	中学(%)	質問内容と選択された項目
再認					
**Q2	97.3	100.0	99.6	100.0	登場人物や動物の名前とやつたことを線で結ぶ/かよこ
**Q3	84.2	91.9	95.0	96.8	ポッポは穴の掘り方をどのようにして覚えたか/生まれたときから知っていた
**Q4	36	75.7	88.8	93.7	赤ちゃんがポッポの体内のどこで育ったか/子宮
Q6	71.2	78.1	78.9	79.9	飼い主が出産前のポッポにすいかを与えた理由/水分をとる必要があるため
**Q7A	66.7	78.4	87.6	89.6	ハムスターの赤ちゃんとの違い/多産である
Q7B	66.7	56.8	65.7	68.3	/生まれてすぐに歩く
**Q7C	86.2	82.4	81.0	96.8	/雄と雌の違いがない
Q7D	25.9	23.0	22.3	21.3	/泣き声をあげない
Q7E	92.1	93.2	94.6	97.3	/おっぱいを飲まなくても成長する
Q7F	88.4	90.5	87.6	87.3	/生まれたときとその後しばらくしてから体の体の容姿、色が違う
**Q7G	63	70.3	81.0	77.8	/大きさ、重さがぜんぜん違う
**Q8	56.9	48.6	61.2	68.1	ハムスターに最も近い仲間はつぎのどれか/ねずみ
**Q9	81	91.8	95.8	97.7	つぎの場面はどの方向から撮影したのか/下
*Q10	85.9	94.5	91.7	94.1	つぎの写真にうつっているものは何か/ポッポのお腹
Q11	76.8	78.4	84.7	84.7	番組中あじさいを写した目的/季節が梅雨であり、雨が降っていることを示すため
Q12A	74.5	79.4	69.9	72.5	下級生に番組を紹介するとしたらどこを選ぶか/ポッポが穴を掘りだす場面
Q12B	58.7	69.1	64.4	57.8	/交尾の様子
*Q12C	27.7	11.8	20.1	16.6	/赤ちゃんがたくさんできている様子
*Q12D	59.2	69.1	61.9	72.0	/赤ちゃんが誕生する瞬間
Q12E	88.6	88.2	87.0	83.9	/生まれたばかりの赤ちゃんを母親がなめて、粘膜を食べるところ
Q12F	91.8	91.2	92.9	92.4	/赤ちゃんにもう歯が生えていることがわかったこと
**Q12G	90.8	91.2	97.9	99.1	/動物病院の医師がポッポを診察したところ
**Q13-0	52.9	36.5	45.0	26.2	番組の制作者は視聴者に何を伝えたかったのか/0点
**Q13-1	46.6	62.2	51.2	65.2	/1点
**Q13-2	0.5	1.4	3.7	8.6	/2点
*Q14	71.6	54.4	72.0	66.0	動物を飼ったことがあるか/過去に飼っていた、あるいは現在飼っている
*Q15	91	95.8	94.2	72.3	ハムスターを見たり抱いたりした経験の有無/経験がある
**Q16A	33.7	21.6	36.0	53.4	番組視聴後ハムスターについて初めて知ったこと/ハムスターを飼うグループが存在する
**Q16B	43.2	18.9	11.2	7.7	/交尾して子どもをつくる
Q16C	55.8	66.2	65.3	61.5	/土のなかに住む
Q16D	36.8	39.2	37.6	43.9	/すいかを食べる
Q16E	87.9	87.8	81.8	86.9	/お見合いして16日ほどで出産する
**Q16F	41.1	31.1	21.5	19.9	/生まれた子どもを親がなめる
**Q16G	25.8	21.6	16.9	10.9	/ハムスターを診察する医者が存在する

図4-5 学年間の選択率の比率



います。

#### 水越：

どうもありがとうございました。今、調査項目をどういうふうにして作ったのか、あるいはそれを分析した結果が3年生、5年生、6年生、中学生というところでどこにどのような発達のギャップが出てきたのかというようなことを概略説明をしていただきました。全部の資料でなくて大変難しかっただろうと思いますが、だいたいの傾向をつかんでいただければありがたいと思います。それじゃあ、あとでまたご質問等いただけるということにしまして新潟大学の松井先生の方から、時間が押してきてまことに申し訳ありませんが一つよろしく願いいたしたいと思います。

### 5. 映像素材に対する視聴者の読みとり問題

松井 仁

#### 松井 仁：

新潟大学教育学部の松井と申します。普段はここに御列席の先生方とはあまり縁の無いところで仕事をさせて頂いているのですが、このシンポジウムにおいては是非何かを話してくれとの生田先生の強い要望に押され、微力でありながらも少し関わらせていただいている映像素材の視聴者読みとり問題について話題提供をします。

先ほどの水越先生のお話にも出てきました「裸の島」という映像をめぐる研究に、蝙蝠が宿り木にぶら下がるが如く私は関わらせていただいております。映像素材の広く教育の場における利用意義を考える上で、この刺激素材の受けてとなる視聴者の読みとり、心理学流？に言えば解釈というか認知というか、後でも申しますように、如何に視聴者の知識構造の中に素材のエッセンスが織り込まれ統合されていくかを検討することは、素材の価値を確認することにおいても欠かせない吟味事項と認識して、仕事の一端を担わさせていただいています。

ここで、この領域の研究について、2つの大きな流れがあると私は密かに考えております。一つは、冒頭で水越先生もお話くださいましたように、特に教育番組の場合で思い浮かべると良いのですが、教育目標みたいなものがまずその番組作成に先立ってあって、それに沿うべく制作者の意図もあり、それを基準として番組および映像素材を作成した成果として、刺激素材をみなす流れです。視聴者の読みとり問題を扱う研究の大方はこの流れに乗っているように思われるのですが、この場合に検討される事項としては、視聴者もしくは学習者がどれだけ番組の主軸に位置する教育目標に近付けたのか、どれだけ制作者の意図を受取れたのかに主眼が置かれましょう。もう一つの流れは、ここにいらっしゃる先生方もそれぞれの実践の場で大なり小なり御経験のことと思いますが、視聴者なり教育番組の場合ですとそれを見ている学習者が、何かこちらからすると突拍子もないことを言い出すのですが、その内容も彼らなりの文脈で丁寧に聞いてみますとそれなりに意味があったりするという現象に関わるものです。この場合、映像素材の読みとりの検討の基準も、前者では教育目標もしくは制作者の意図に置かれることになるのに対して、視聴者の読みとりの背景にある学習歴や生活史その他諸々の視聴者側の要素に埋め込まれたところに求められるということになります。

#### 制作者の意図の読みとりを確認する

ここで2つの流れの前者の方といいますか、制作者の意図を視聴者がどれほど受けとりまた的確に読取れているのかという問題について、先ほどから何回かちらりちらりと出ています「裸の島」研究でお話します。この研究プロジェクトで私が関わっているのは、その中でも視聴者の読みとりの個人差情報を如何に引出し、分析・評価するのかという部門であります。

この流れの吟味では、制作者の意図が比較的明確にあるだけに、視聴者の読取りの確認についても、制作者側が「わかったか?！」と問い、

そして時には問詰め、それに視聴者側が諸々の圧力も受けつつ「わかった」（つもりにさせられる）ということになりがちな面があるようにも思われます。方法論的にまだまだ問題を抱えている研究領域だなぁ、と思っております。ですから、少し視聴者には意地悪かもしれませんが「わかった」とはいいづらい、もっと進めて何を確かめられているのかわかりにくい状況に視聴者をおいて、そこで引き出される視聴者反応から読みとり評価を行うことを考えました。具体的にどのような手続きをとったのかと申しますと、この映画の主だった各場面を切り取り、ある意味で映画を切刻んでですね、バラバラにし、任意の場面对の関連性についての視聴者の評定を促し、これを分析対象とし、場面間の関連性構造を再構成して視聴者の読取りを評価・検討しようとしたわけです（生田ら、1997）。一つの作品、おそらく制作者やそれに共鳴してこれをより深く研究しようとする人たちにとって、これ「全体」で視聴者に何らかの意図を語りかけていると見なしているのかもしれませんが、これを無残にも切刻み、また視聴者の評定で貼り合わせて検討しようなどということは、素材に公私共に様々な重い入れのある方には心情的にも困難なことだろうと思います。むしろ、このプロジェクトに引き込まれるまでこの素材と縁の無かった私だからこそ推進できたことと、もっと言えば門外漢だからこそ果たせる役割をこの研究プロジェクトで負っているのだなぁと、勝手に思っております。

少し話がずれましたが、視聴者から場面間構造認知に関する情報を引き出し、それより素材を再構成することで、制作者の意図した一般でいう物語の伏線構造をどれくらい読みとれているものなのかを検討しました。視聴者から引き出した情報から素材を再構成する際の分析手法として、多次元尺度構成法というちょっと高級な技法を使ったのですが、この分析の手続きをとることで、場面構成を図5-1にあるように地図のように描くことができました（生田ら、1995）。図5-1では場面の時系列にそって番

号がついているのですが、基本的に時系列にそって図の中と申しますか、この素材の物語空間をまず最初の数場面（場面1、2、3、4、5、6）で張り巡らした後に、2周ほど物語の展開が循環しているように見て取れます。ここで、更に時系列のまとまりを見てみますと、視聴者のこの素材の認知は図5-1をモデル化して図5-2のように示すことができると考えました。

図2にそって視聴者認知の構図の特徴を申しますと、第5象限には収穫の主題が位置しております。そして第6象限付近には、素材中で時系列として続く場面群（場面7、8、9、11、12）、これを「生の営みにおける水の掛け買いのなさ」と命名したのですが、これと時系列としてはずっと後に出てくる場面群（場面41、42、43、44）、これを「喪失の悲しみに耐えながらも水に関わる労働の継続」と幾分冗長ながらも命名したのですが、これら2場面群が近接して認知されたことが示されました。この素材の制作者である新藤兼人は、この素材に込めた意図を盛んに言語化してしまして出版もされているのですが、それによると、生の営みにおいて様々なことが起きようとやっぱり基本的な営み、ここでは水に生の営みを象徴させているのですがこれに関わる労働は続いていく、それが生きるということなのだ、との主張があるようです。そして、その主張を映像素材に具現化する上で、図2というところの「生の営みにおける水の掛け買いのなさ」と「喪失の悲しみに耐えながらも水に関わる労働の継続」を伏線関係として構成したことを言っているのです。この制作者側の伏線構造の意図とその意図と独立したところでの視聴者の伏線認知の一致がここで認められたことは、この素材に制作者の込めた主題の伝達力の強さの一端が反映されているのかもしれないと、私は考えました。国際的に様々な賞を受けているということも専門家レベルでの評価としては重要ですが、一般視聴者に対する価値を評価する上では、この伝達力の強さの現れは素材評価の上で極めて大きな根拠になると考えております。

加えて、せっかくですので第Ⅲ象限・第Ⅳ象



図5-1 場面の布置

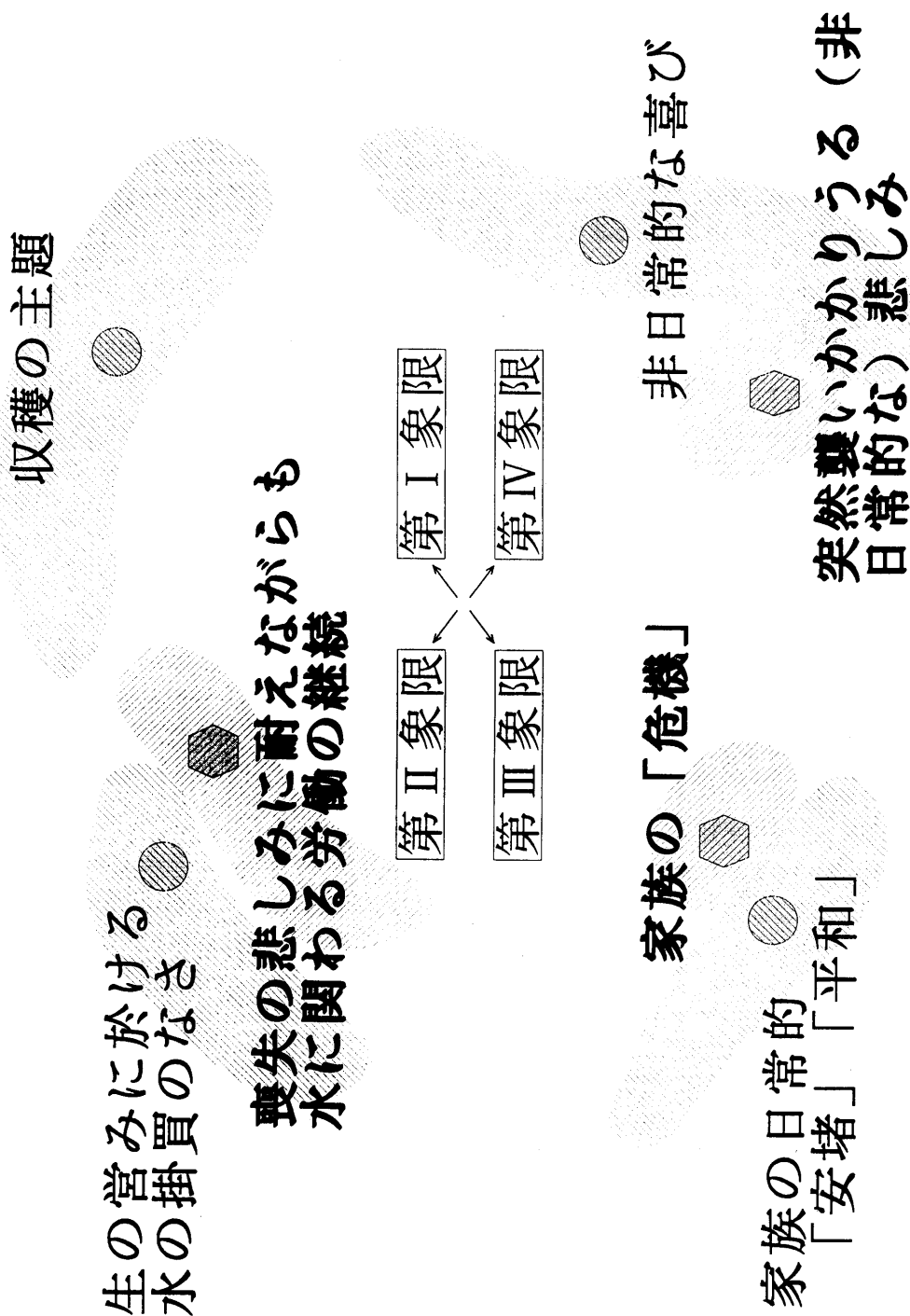


図5-2 場面群の主題

限に示された視聴者の読みとりにも触れておきましょう。第Ⅲ象限には、まず「家族の日常的安堵と平和」と命名された場面群（場面10、13、14）が位置し、それに「家族の危機」と命名された時系列としては前者とやや離れた場面群（場面34、35）が隣接して認知されていたことが示されました。第Ⅳ象限には、「非日常的喜び」と命名された場面群（場面16、25、26、27）に時系列としては少し離れた「非日常的な悲しみ」の場面群（場面36、38、39、40）が隣接していました。この辺の関係についての制作者の意図の表明に関しては私自身良く存じていないところでありまして、ここにいらっしゃる先生方に助言頂きたくも思っているのですが、家族生活について、日常的安堵と危機（家族の明／暗とも言えましょうか）、非日常的喜びと悲しみ（やはり明／暗とも言えましょうか）が隣接して認知されているということは、大学生被験者において、既に家族生活の明／暗二面性の認知が見られたという点で、個人的に興味深く受け取っております。

私のこの話題提供の前にありました木原先生と生田先生のお話は、ハムスターの出産と子育てを取上げた映像素材に対しての番組制作者の意図の享受を質問紙調査で確認しようとする試みとして、私は「読みとった」のですが、ここで「裸の島」素材での試みは被験者反応から場面間構造の再構成から制作者の意図の享受を確認し、素材の価値の高さの裏付けをまた一つ積んだ試みと言えましょう。是非、この検討の深化を深めるためにも、このシンポジウムでハムスター番組制作者にフィードバックしているのと同様に、「裸の島」素材についても制作者に検討成果をフィードバックして相互の読みとりの深化を計る方向にプロジェクトを進めていただきたいものです。

### 視聴者の個人経験を基準とした読みとりを探る

では次に、視聴者の突拍子もない読みとりについて少しお話ししましょう。「突拍子もない」という言い方には何か「的外れな」引いては

「間違っている」というニュアンスが含まれやすいように思うのですが、映像素材の読みとり問題に引きつけて考えますと、これらのニュアンスはあくまで制作者の意図や番組の持つ教育目標に「読みとりができたか否か」の判断基準を求めているから出てくるものでして、この基準から大きくずれる読みとりに対して下してしまいう判定態度なのだろうと考えております。ここでは、このような基準の求め方のあり方から少し離れる努力をし、一見「突拍子もない」読みとりの視聴者や学習者にとっての貢献についてお話ししたいと思います。

このような個人に考察の基準を求めた映像素材の吟味については、極端な例に傾いてしまっていますが、心理療法の話題の中に手掛かりがあるように思います。私自身、前職で教育相談の業務に関わる経験があったものですから、そこで公刊化した事例を採り上げてお話しします。

ここでお話しする事例といいますが、人はですね、彼が18才のときに私が初めてお会いした男性で、診断としてはいわゆる対人恐怖と申しますか、その中でも「町中を歩いていても後ろから何かされるのでないか」との背面恐怖のような重度の症状を訴えていた方です。ここにいらっしゃる皆さんにとって、「後ろ」といいますか背中の方というのはいかがなものなのでしょう。うしろには目がついておりませんし、バックミラーを付けて歩いているという人もちょっと見かけません、要するに後ろとは見えない、従って制御が困難な方向で、後ろからは何がやって来るのかわかったものでないわけですが、まあ普通の人には「後ろから変なことをされたことはなかろう」となぜだかはっきりした根拠も無く思ってしまうていて、気にかけないでいるわけです。何でそんな風に人は思える様になっていくのかといったことについては、エリクソンあたりが幼児の姿勢の変化と精神発達の関係の考察辺りが参考になると思うのですが、まあいろいろな考え方があって、謎だらけで興味深いところです。ですが、どうも基本的なレベルでの自分の居る世界への安心感の獲得と関係し

ていそだというのが一般的な見解としてあるようです。よって、自分にとって見えないところを怖がること・その方向から脅かされることの疑念にまわり憑かれることと、基本的なレベルでの安心感に障害の有ることには繋がりがあるように考えられています。この人の場合もどうもそのような障害を強く持っている面が色々伺え、実は他にも様々なこだわりを持っていたのですが、心理療法の中で個々の問題はかなり軽減されていったわけです。ただ、こういう問題を抱えた人は外から見て、それこそ周囲の人々の基準からしてかなり治ってきた・もう大丈夫でないかと思えても、本人にとっては辛い時期の経験の重みが簡単には消せず、本当に自力で社会に船出することが大丈夫との証を自分の中でも見出せず、強い不安と焦りで「ウズウズ」していることが多いように思います。このような「治癒」と世間では称せられる急激な変化の時期の対応は、一方で自殺などの事故の危険も高い時期ですので、極めて難しいのです。この人の場合も私との治療関係が10年近くになっていて、そのような段階に入っていたのだと考えていました。

そのような時期にこの人が出会った映像素材は、大林宣彦監督の「ふたり」（原作は赤川次郎）という映画です。この映画の短縮版はNHKのほうで作成と放映されたようなので、偶然にもこのシンポジウムとの御縁もあるのかなと思うのですが、この映画のあらましは、この人の表現に沿って言いますと次のようなものでした。

### \*\*ふたり\*\*

美人で頭もよく、一家を支えていたといっても過言ではない高校生の姉と、対照的に一見どこでもう一つさえない中学2年生の妹が暮らしている。周りから見るとあらゆる意味で優秀な姉に対して、どうにもお荷物の妹といった感じであるが、こっそりと小説を書く妹の中にキラリと光るものを認めていたのはこの姉だけだった。このような姉妹の暮らしの中で、姉が突然

の交通事故に巻き込まれて死んでしまう。姉のいなくなった暮らしの中で、妹は何とか生活を立て直そうと頑張る。その中で死んだはずの姉が幽霊になって出てきて、妹の様々なピンチを乗り越えることを見守り、支えてくれる。そうした幽霊と妹との協同生活の中で妹は成長し、次第に姉の存在無しでも何とか色んなことをこなせていけるようになる。そして妹が死んだ姉の年に追いつくころ、姉の幽霊は出てこれなくなり、妹も自力でやっていく決意をする。そして、それまでは幽霊で出てきてもらう形で姉との関係を求めていた妹だが、それ以後、姉とのかを小説に書くことで見えなくなった姉を自分の手で捕まえることにする。

この人にとって最も印象が強かったのは、この映画のラストシーンであった。このシーンでは、姉の死んだときと同じ高校の制服を着た妹が坂道を登っていく。前から見るとそれはたしかに妹の姿なのだが、ショットが後ろからになるとそれは姉の姿であった。この情景について、この人自身「妹にとって、たとえば妹が見えないところに行ってしまったとしても、姉と妹は合体して、妹にとって見えないところ（すなわち後ろ）から支える人になった。そういうところまで妹は成長してきたのだから見えるところに居る必要はなくなったのだ」と語った。（松井、1992より抜粋。一部改変）

この人自身、治療の場から巣立って自力で如何に生きていくかとの課題に直面していたわけですが、姉が幽霊として出てきてたすけてもらえなくなった妹に自分を重ね合わせていたのだらうと思います。この人自身の生につきあってきた当時の治療者の記録には、この語りは映画のことを語っているのか御本人のことを語っているのかわからなくなる瞬間のあったと記されています。また、上記の最後のところのこの人による読みとりは、制作者の意図に近いところも大なのですが、「合体」という表現にも見られるように精神病的な言い回しに見られる面も大に残しております。しかし、ここでの映像

視聴を通してこの人が獲得したことは、それまでは「自分を脅かしてくる方向」であった後ろが「目に見えなくとも支えてくれる方向」としての後ろと再学習した点に注目できると言えましょう。このような読みとり、そして再学習は、見方によればと申しますか、制作者の意図やこの素材の配給者の意図からすれば「突拍子もない」ものを含んでいましょう。まして、「ふたり」の制作者もこの映像素材に一人の患者を治療に導く意図を込めていたとは考えられません。むしろ、患者自身の生活経験を基盤とした感性を素材の示すところに織り込んで、この人自身と映像の関係も含めて映像素材を読みとり、変わりゆくこの人自身の自己表現の手掛かりにしたのだと考えられるのです。そのような投影的になり得る質を持っているという点で、この素材の優れている点が評価できると私は密かに考えています。この後、この人は常勤職に就き、次第に治療の場から実質的距離をとっていきました。ちなみに、私が常勤職にありつけたのはその後3年ほど経ってのこととして、この追い越されの現象からすると、もしかしたら治療者との関係をも予期しての「突拍子のない」読みとりだったのかもしれないと思えるのです。

理解を深める手掛かりということで極端な例をとりあげましたが、このような事例を見、経験する中で、私は映像素材の非日常生の効果のようなものが、より自覚的に活用されて良いのでないかと考えております。この考えの背景には、日常性を少し外れたところでの遊び心の許容が、生活感あふれる自由な発想の重要な源の一つになっているのでないかとの思いがあるのです。ただ、視聴者のこのような学習経験を確かに根付かせるためには、それをともに楽しめるような同伴者の存在が条件としてありそうですが……。

### 「動物のたんじょう」素材について

映像素材の読みとり問題での2つの考え方をお話したところで、このシンポジウムのメインともいえる「動物のたんじょう」素材につい

ても、私に一言いわせて下さい。

先の番組制作者でいらっしゃる前野さんのお話によると、この番組には3つの意図があるとのことでした。私なりに受け取ったところを復唱しますと、次の3つでしょう。

- ① 生命誕生のしくみに関する知識の伝達
- ② ①にかかわって、育児にわたっての両性の役割と協力関係の知識の伝達
- ③ 生物には基本的に育つ力が備わっているという認識の伝達

ここで、制作者の意図と独立に視聴者がどのようにこれらの伝達事項を読みとれているのか、この素材の価値を見極める上でも重要な論点となるのでしょうか。順に言えば、①②については、先の木原先生と生田先生の試みにあるように、この番組の視聴で受けての知識の量と質がどのように変容したのかをとらえる試みを通して吟味できそうです。しかしながら、③についてはどうでしょうか。③でいうところの「生物」ということには、私の「投影」ではありますが、当然視聴者自身も含まれるのでしょうか。そう考えると、他の①②に比べてかなり重大なテーマでありそうです。ここでいう「重大」とは、一つにはこの認識を自分自身と切り離して客体化/対象化して学習し難いという含みで言っております。つまり、①②に比べて③は、視聴者自身との関係や生活の中に織り込まれるものとして吟味する必要があると考えるのです。

この番組のターゲットとなる視聴者は、自らが「育つ」ということについてどのような既存知識構造を有しているのでしょうか。その辺についての番組提供者の「読みとり」が、この意図③の達成と関係してくるのだらうと私は考えます。また、前出の2つの読みとり問題のスタイルでいえば、後者の方、すなわち視聴者の「突拍子もない」読みとりも排除すること無く、その知識の各視聴者の知識構造への織り込み具合を査定することが、この吟味を行う研究者としても要請されるように思えます。先生方には頑張ってもらいたいところです。



に意義深く作用するには、心理療法の過程において治療者をもって「道行者」としてその任の本質を示唆する田畑（1987）の言う如く、その突拍子のなさを、さりげなく、視聴者と関連付けながらも一緒に「楽しめる」人が必要なのかと考えます。先の私の自験例で言えば、一人の視聴者の「合体」との表現にこの人の病体の実態を看取る専門家の目と共に、一つの成長の証と発達の適応的側面も読みとる目を持つ人という意味での、一緒に「楽しめる」人の存在が求められましょう。学校教育ではやはり教師にその任が期待されているのでしょうか。頑張ってもらいたい物だと一人の新米父親としても思っております。

結局、映像素材の「視聴者にとっての」利点を生かしつつこれを使いこなす人の養成が要となりそうだと仄めかすところで、私の話題提供を終わります。

#### 水越：

たいへんどうもありがとうございました。非常に貴重な、あのう、裸の島で、十分私が述べられなかったのを、すばらしい手法で、あのう、内容の受け取りを大学生がどれだけ正確にできたかということまでいっていただき、更に今、大林監督の「ふたり」を例に取りながら制作者の意図からのずれということも、こういう形であり得んだというようなご指摘で大変貴重な提案をしていただきありがとうございました。えーと、それではですね、あと、これ押せ押せで大変申し訳ございませんのですが、えーまずあの、桐蔭学園横浜大学の赤堀先生、それに続いて東京情報大学の小町先生、いずれも、もとNHKマンでありまして実際に番組を制作した豊かなご経験もあるお二人でございますが、約10分程度でコメントをお願いしたいと思います。

## 6. 視聴能力の構成を問う

赤堀 正宜

赤堀正宜：

赤堀ですが、時間の制限がありますので、かい摘んで申し上げます。えー、私も番組制作の経験があるんですけども、研究会なんか行きまして、水越先生やたくさんの先生方がいらっしゃいまして、一緒に研究しまして、何であの先生たちはかなり番組の意図も分からないでに勝手なことを言うんじゃないということを考えておりまして、それで憤慨したようなこともありました。今度は研究する立場に立ちますとね、やはり番組の意図をちゃんと聞いてやらないといけないなということがありまして、でそういうことから言いまして、非常に今回の研究が、生田先生、水越先生がやられた研究が制作者の意図、前野さんを訪問してやられたという事を初めて聞きまして非常にこれはよかったんじゃないかとまず感じました。

それでこれは、今書いたんで大変汚いんですが、私たちが番組を作っていく場合に番組をどのように評価をするかというのを考えたんです。それをまとめてみますとですね（資料）、番組の意図が、明らかに明確に意識されているかというような問題、これは映像視聴能力と非常に関係あるのでちょっと出したんですが、構成の設定された目的に向かってよく組み立てられているか、これは構成要素だと思いますけれども、それからですね、素材の選択が非常に適切かどうかというような問題、これは前野さんがいろいろ工夫してやられたんですけども、こういう素材の選択というものがあります。それから素材がユニークかどうか。動物のたんじょうでもですね、いろいろユニークな素材をどういう風に使えるか。それから、映像の構成、質、加工、加工技術に優れているか。これはCG何かを使っですね、かなり映像の質がよくなっていますけれども、それから提示者、プレゼンテーションがよいかどうか。これはナレーションの問題もありますけれども、これはあの先ほど言いました私たちの研究では、です・まず調、がいいのか、である調、がいいのかあるいは、でしょうか調がいいのか、いろいろ研究しているわけですけどもそういうですね、どういうナ

レーションがいいのか、あるいはナレーションがない方がいいのか、ない場合もあります。ない場合はドラマ化した番組ですが「教え授ける」、水越先生がおっしゃっている「教え授ける」番組ではなくて、「教え考えてもらう」、あの、「授け考えてもらう」番組というようなものになるとは思うんですけども。それから7番目は、利用者の学習意欲を刺激するか。8番目は利用者の思考を発展させるかどうか。目的が達成されるかどうかと言ったこんな順序で私たちは番組を作ってきたのですけれども、これがやはりかなりですね、番組の視聴能力のスケールという要素を決める場合の要素になってきているんじゃないか。

それで、結果をですね、拝見しまして非常にですね、先ほど言いましたように、制作者の意図をリサーチされたということが、やはりこの研究をですね、高めた理由ではないかと考えております。で、制作者の場合、教育番組の場合、明確な教育意図がありまして、それに向かってどういう風な構成を立てて、組み立てをするかということで、努力するわけですが、そのプロセスをですねやはり、リサーチして、それに基づいて映像視聴能力を考えたということは非常に優れた方法だろうと思います。

それからですね、この結果を拝見しますと、一番点数が高い、それから標準偏差が狭い領域というのは、技法なんですね。それで、非常に私びっくりしたんですけど、子どもたちにとっては非常に制作技法っていうのは、慣れているなって。この技法の理解の差っていうのは、三年生と、五・六年生と、中学三年生とあまり差がないんですね。しかも理解の領域っていうんでしょうか、分布がですね、広がっていない、つまり、ほとんどの子どもがよく理解しているってことがよくわかりまして、非常にこの点ではですね、私は、今の子どもはですね、やっぱりそういう、映像に触れている量が多いんじゃないかって言うことを感じました。

それから、一つ問題なのは、この「生命の神秘」のですね、プロセスっていうんでしょうか、

これが1つの主題だろうと思いますけども、交尾から妊娠、出産から育児というやっぱりプロセスがございますね。どんな、こういうプロセスをですね、もうちょっとやはり、どういう風な形で調べていったらいいか、こういうものがやはりこの番組の主題になっていると思うんですね。それでたぶん子どもたちは映像からですね、2の主題の理解というのはかなり高いですね。非常に標準偏差も狭いわけですからいいんですけども、こういうプロセス、時間的な順序立てをした理解、映像の理解っていう、できているかどうかっていう、こういったことがどうやってこれから調べたらいいかっていう問題が、課題が1つ残っているんじゃないかというふうに思いました。それからですね、もう1つはですね、生命の尊厳についての理解ですね、こういう教育の目的って言うのはやはり、知的な理解と技法的な、技術的な理解と、情緒的な、あるいは道徳的な理解っていうのがあるわけですけども、この情の理解の問題についてですね、どういうふうに映像の読み取りの中で、掘り起こしていったらいいかといったような問題っていうのはかなり難しい問題があるんじゃないかっていうふうに考えています。

後ですね、これで見ますと、高いものはやはり、再認というのは非常に高いもんですから、やはり映像のですね、何て言うんでしょうか、インパクトって言うものは非常にあるんじゃないか、依然としてですねやはりこういう映像教材っていうものは子どもたちの知的なですね意欲をですね刺激して、それからですね思考を発展させていくことになっているんじゃないかということ、この調査からですね、非常によくわかりまして、私制作していたもんですから、その後追いのような形で非常によかったなというような感じがしております。えー、時間の関係で簡単ですけども。

次に資料として「番組評価項目と基準」をあげておきます。

## 資料

## 番組評価項目と基準（標準値の作成）

赤堀 正宜

映像視聴能力に関する研究は既に水越先生や吉田先生をリーダーとして優れた成果をあげて来ている。こうした知見の上に映像制作としての経験から日頃考えていることを私なりにまとめた。まず制作者の側から「映像を」考える時、作品（テレビ教育番組）の評価項目を考え、この項目別に評価スケールを作り、子どもに理解できる項目に書き直してテストし、視聴能力を測定する方法があるのではないかと考える。さらに、視聴者（児童・生徒）の代表としての教師が考案する測定項目をつきあわせて完成し、調査したらどうであろうか。

以下は制作者サイドから考えた評価項目である。読解項目と言ってもよい。

## 1. 読解項目

- |                                  |        |
|----------------------------------|--------|
| (1) 教育目的が明確に認識されているか。            | 目的の読解  |
| (2) 構成が設定された目的に向かってよく組み立てられているか。 | 構成の読解  |
| (3) 素材の選択が適切か。                   | 素材の読解  |
| (4) 素材がユニークであるか。                 | 新奇性の読解 |
| (5) 映像の構成、質、加工技術に優れているか。         | 質の読解   |
| (6) 撮影技術、音声、照明等に優れているか。          | 技術の読解  |
| (7) 提示者（プレゼンター）がよいか。             |        |
| (8) 利用者の学習意欲を刺激するか。              | 学習促進理解 |
| (9) 利用者の思考を発展させるか。               | 発展促進理解 |

（赤堀による）

これをNHK学校放送小学校理科番組「わくわくサイエンス」『動物の誕生』の映像視聴能力の分析要素との関連を考えると次のようになる。

主題の理解	目的の読解
再 認	思考の発展 学習促進
再 生	思考の発展 学習促進
技法の理解	撮影技法、映像の質

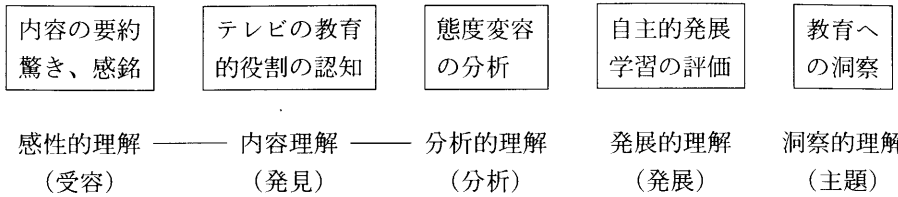
（新奇性、プレゼンターとしての少女への感情移入などを加える調査すると子どもたちの映像視聴能力がより詳細に明らかになると思う）

参考までにもう一つの番組評価項目を紹介しておく。

- (1) 映像特性（映像でなければ表現できないもの）を使っているか。
- (2) 分かりやすい内容構成になっているか。
- (3) 伝えたいことが明確に表現されているか。
- (4) 多様な表現方法を効果的に組み合わせがうまくいっているか。
- (5) 映像と音声（効果音を含む）との組み合わせがうまくいっているか。
- (6) 映像の編集方法などの制作技術を身につけているか。



反応パターンによる映像視聴能力の差



4. 小学校6年社会科番組「五人組」の視聴から（理解の深さの測定）

私が制作に関係したこの番組はドラマ化された番組で、TV教師はもちろんナレーションによる解説は一切ない。「教え授け型」の番組ではなく「考えよう型」の番組である。

参考までに、このドラマ教材をどのように読みとるか、評価の要素と基準を考えてみた。

(1) 番組全体の理解

- ① 番組の粗筋理解
- ② おもしろさ（役者の仕種など）の感性的理解

(2) 身分社会の理解（要素理解）

- ① 武士と農民の衣服の違い （生活文化より）
- ② 支配者と被支配者の違い （座る位置による）  
（労働者と非労働者）  
（ことば使い）コミュニケーション  
（身のこなし）  
（感情移入）お願い、哀願とう

(3) 租税制度の理解（武士と農民との話し合いの中から）

（かくし田から）

(4) 連帯責任制度の理解（社会構造理解）

（庄屋の言動から）  
（農民の言動から）

(5) 徳川幕府の民衆支配の方法としての五人組についての理解

## 5. マトリックスによる視聴能力の記録表（案）

関連項目はもう少し多くなる。相関の高さによって視聴能力を測定し学年差、地域差を調査する。

映像要素 理解要素	服 装	食 べ 物	身のこなし	感情表現	言葉使い	住 ま い
身 分						
貧 富						
制 裁						
税 金						
連 帯 責 任						
幕 府						
武 士						

注 映像要素 具体的な映像

理解要素 期待される読みとり要素

## 6. 視聴能力の今後の問題

多量情報時代において、映像リテラシーとして、映像を「選ぶ」「比較する」「評価する（批判する）」能力が要求される。こうした能力の形成をどのように評価するかが課題となるであろう。

**水越：**

どうも本当にありがとうございました。貴重なご意見で、特に生命の神秘のプロセスの理解をさらに詳しくってな御注文もいただきましてありがとうございました。後でまた討論の時間、少しでもあればと思いますが、それでは続きましてこれも同じくNHKマンとして御活躍で放送教育開発センター等でも優秀な番組を指導してこられました小町先生の方から、また同じような形で時間を制約しますがよろしく願います。

**7. 映像における文脈と起承転結****小町 真之****小町真之：**

小町です。赤堀さんがおっしゃったこととダブルにならないように簡単に言いますと、番組を作る場合からいうと、あるテーマが、学校放送の場合にはあるテーマが与えられていて、それをどういうふうに表現していくかっていうことになってくると、それはどういう部分に分けられるか、それからその中核的な映像は何かっていうことをおそらく考えて来るだろうと思うんです。ですから、全体のねらいってというようなものをいくつかのシーンに分節化するっていうことをまずやって、それぞれのシーンをどういうふうに配列するかっていうようなことが問題になってくる。もちろんそれはその所々で、それぞれのシーンで中核的なショット、さっきの例えば交尾のシーンの交尾のショットであるとか、あるいはその下から映した所だとか、それからあの160枚の映像から作った映像だとか、そういうようなものが中核的なショットとしてそれぞれのシーンにあるんだろうと思います。

そうするともう1つは、先ほどから技法の話がでていましたけども、そういうものをショットとして捉えるだけじゃなくて、その前後にある前後の部分、文脈との関係でそういう映像っていうものの理解が上手くいくかいかないかが決まってくるんじゃないかで、そういう辺りの

所がこれから先それぞれのショットを掴むだけではなくてその前後の関係っていうものを掴まえていく必要があるだろうというふうに思います。ちょっとうまい絵が描けなくて、そこでバタバタ描いていたもんですからあまり上手いきませんけども、それが1つあるかと思っています。

それからもう1つこういうショットじゃなくて、シーンを作るっていうことをいいます。問題にする時に先ほどの松井先生のお話にも多少関係するかと思うんですけど、よく番組では起承転結っていうことをいわれますけども、起承転結について頼山陽がこういう俗謡をもとにして説明した。起承転結っていうのはもともとは漢詩、四言絶句とか七言絶句とかの作り方の問題なんです。「糸屋の娘」っていうのが「起」で、ここでもって主人公が、あるいはテーマが提示される、で「承で」もって「姉は十六、妹は十四」っていう形でそれがもう少し具体化される、描写される。それからもう少し糸屋の娘の話をするかと思っているとそこから一転して諸国諸大名は、っていうことで話ががらっと変わってしまう。それで諸国諸大名は弓矢で殺すっていうことで話が変わったかと思っていると最後に、糸屋の娘は目で殺すってことで、もういっぺん戻ってくる。

実際の番組はこういうふうに4の部分に別れているとは限りませんから、どこからどこまでが起で、どこからどこまで承だというのを具体的に探していこうとすると大変ですし、そういうふうに上手くいかないっていうことがほとんどの場合だと思うんですけれども、問題は映像っていうのは時間の流れの中であるわけですが、そういう中でそれぞれのブロック、いくつかの、先ほどで言えばシーンっていうものが何らかの形で連続しているのとある部分ではギャップがあって、おやと思わせるような所がある、そういう連続の部分と、非連続の部分とがありながら全体として構造ができているといういうことがあると思うんで、そういう部分をどういうふうに掴まえるかっていうのが、これは小学

校の三年生ぐらいを対象にした調査では無理かと思うんですけども、もう少し上の段階（未満）、今の調査ではそういう部分が必要になってくるだろう、ま、それは先ほどの松井先生がおやりになった調査の場合にもあるじゃないかという風な気がします。そんなようなことを、今日は番組の視聴が終わったところで、遅刻してきたものですからハムスターの方の話はあまりできないんで、一般的にいうとこういう問題が調査についてはあるんじゃないか、番組を作る上ではこういう問題点となる、そういうふうに思います。どうも。

#### 水越：

ありがとうございます。さすがに番組を長い間作られてきた方のフィロソフィーを込めて、小町先生は今日番組を見ていただいておりますが、皆さん方ご覧になって前野さんのハムスターは起承転結があったのでしょうか。目で殺すあたりは何が来ておったのかってところがたいへんおもしろいところだと思いますが、いずれにしても豊かな揺さぶりをかけていただいております。ありがとうございます。

## 8. 質疑応答

#### 水越：

それではですね、あと時間はわずかではございますけれども、ぜひここに居られる皆さん方、新潟大学の先生も居られれば、教育委員会の方もおられれば、学校の先生も居られれば、学生さんも居られるという、ま、非常に異質な集団でございますし、一般の方もご参加のようでございますし、是非あの一人でも二人でもご意見ご質問をいただいてそして幸い今提案したものは全員ここにおりますので、答えられる範囲内ではお答えしますし、持ち帰ることもあろうかとは思いますが、いかがでしょうか。

はいどうぞ。

#### 一般：

学校の現場におけるものですが、制作されたご本人がおいでなものですから、そこに関わって今ほどでました、文脈と、文脈って言いますか、そのつながりって言う意味で一つ聞きたいんですが、最初にたいへん逃げ回るって言いますか、たいへん元気のいいハムスターがでましたね。この意味と、女の子がでてくるわけですが、しかもこの個人名が出たと思うんですが、この意味はその後の交尾とかですね、そういうことに私は非常に制作意図があったんだろうかと、今にしてみますといろいろなことが考えられるんですが、実は私の考えですと映像のおもしろさってのは、案外そこにあって、子どもですねそういうところに変な興味を持って見ているんじゃないかと、受け止めではですね、実はそういうことを膨らますこともその視聴能力としては非常に大事ではないかという考えを持っているんですが、大変元気のいい逃げ回るハムスターと個人名とそのことと後で非常に、単純に交尾し合うというような時間の問題等あるけど、この辺の制作意図を。

#### 水越：

分かりました、それじゃあですね、すぐお答えいただく前に、制作者の前野さんに対するご質問とかご意見があれば、もう一人二人聞いて、何かご意見はございますでしょうか、ご質問ございませんでしょうか。じゃあよろしいですか。では今のことについて前野さんどうでしょうか。初めの逃げ回るシーンと、女の子の実名が出ていたということと、後のシーンと。

**前野：**実名というのは女の子の。

**水越：**女の子ですよね。

#### 前野：

ポッポちゃんという名、それとも沢本佳代子っていうの、あ、分かりました。後半からいきます。沢本佳代子と字幕を出すのは決まりになってましてですね、そういう理由で出していますのと、後はこれは後半にも関わるんですが、頭の2分、イントロです。イントロの中では主人公、登場人物が紹介でき、かつその登場人物、

動物もそうですね、キャラクター紹介をする。そのキャラクターがチャージングでなければそれ以後の15分間視聴者がついてこないということで、何がチャージングかなと考えまして、ハムスターをどう撮影しましてもチャージングはチャージングです。ただわざわざ新聞紙の下を潜らせたりとかですね、ピアノの奥に行ったり、こちらを向いたかと思うと、くるっとUターンしてきたりとわざわざそういうところを持ってくるのはチャージングさを出そうとしまして、それによって子どもを引きつけようと、及びその紹介ですね、という意味でございます。

#### 水越：

そういうことでよろしいのでしょうか。それではですね今、制作者についてご質問でしたが、今度はその、生田先生、木原先生のような調査のやった内容、あるいは赤堀先生がそれに付け加えてこういう所がやっぱり見所だってな形を追加していただいたんですが、視聴能力の調査というようなことをやった研究について、それから松井先生が映画を、もうひとつの映画も使い、二つの映画でもってご説明していただいた内容、そういう映像視聴能力なんかの評価調査に関するようなことでご質問でございますでしょうか。後の司会をしていただきますが、中野照海先生、ICUのですね、よろしくお願いします。

### 9. 映像理解における絵と文字の関係

中野 照海

#### 中野照海：

あの、質問項目はいくつも書いてあるんですが、これを全部やっていると6時30分ぐらいになりそうなのでやめておきます。ただ一番簡単な、でも難しそうな質問の一つさせていただきます。と言いますのは、「裸の島」で一方でお使いになった映像の理解能力、あるいは映像認知というような事柄と、片方の先ほど見せていただきましたハムスターというのは性質がだい

ぶ違うと思います。で、その違い方一番大きいのはハムスターの方はかなりのナレーションがでていると思います。そうしますと、人々の理解というのが絵だけによる理解なのか、あるいは言葉による理解なのかということがやや分離不可能な形ではなからうかと思われました。ですからもしもあの、私の一つの好奇心であります、一方は絵を見ないでナレーションの音だけで、それだけでどこまで分かったのかなというのを考えてみて、それを引き算すれば、えらい雑駁な意見であります、それを引き算してみると絵で分かったのかなと思います。ただこういう問題は本当に難しくて良いテレビジョン番組というのが音を消して絵を見たら、あるいは絵を消して音だけでという、そういうことをもともとしないでお作りになるものですから、いい音といい音声と、いいナレーションという関係なものですから、切ってしまう、分離して扱うということは決していいやり方じゃあないんですが、一つの便法として、一方で音を消した場合に絵がどこまで分かるのかなというようなこととの関係を見ていただければもっとおもしろい研究になるのではないかという気がいたしました。

#### 水越：

大変貴重なご意見いただきまして、実はあの、これは中野先生、今の連続ではないんですが、かつて僕は、今ここにおられますが、大阪教育大の田中先生と一緒にイギリスへ行った時に向こうで手に入れた、ACCIDENT IN A PARK-ROADという5分ぐらいの、交通事故を起こしたドライバー、子どもをひいてしまったんですが、その時の目撃者をいろいろな角度から証言させて一つの事件を構成させていくという5分ぐらいの素晴らしい、ケンブリッジが作った番組を実は今年取り出しまして中野先生が言われたと同じようにですね、一つはそのままストレートで英語のままの物、もう1つは完全に日本語に吹き変えたもの、もう1つはまったく音を、台詞を消しちゃったもの、音だけは「キー」っ

というブレーキの音なんかは出しますけれども、いっさい台詞を見せない、音全部を消しちゃったのというような形のもと三つを、今私のゼミで、私一人ではできませんので英語の教師と、コミュニケーション論の教師が三人で私とやって、今大学生に調査をやって、完全に音を消した場合と英語で聞いた場合と、日本語でやった場合とはどうなんだろうかということを今調査やりまして今まとめにはいっているところでございますが、ハムスターについても場合によっては音を消したということを意図するような分析の仕方もありうるのではないかと考えて今後検討していきたいと思っております。

## 10. 共同研究の意義

### 水越 敏行

それではもう一人ぐらいあれば大変ありがたいんですが、いかがでございましょうか。えー、それではあまりないのを無理にお願いするのは私の意図ではございませんし、次にまた中野先生の御司会のあれも始めなければいけないので一言だけ申し上げてこのシンポジウムを終わりたいと思いますが、まずはあの、私は今日発表いただいた内容等についてはあまりくどくど申し上げませんが、これからこういった研究はですね、やっぱり一人じゃできないと、じゃあ二人ならできるとかという二人でもできないと、じゃあ人数がたくさんおればできるかということとそれもできないと、じゃあどうということなのかという、質の違う人がチームを組むってということがいかに大事かということをお聞きしました。だから、同じ心理学者ばっかり集まればだいたい喧嘩しますし、教育学者ばかり集まればもう二日後には顔も見たくないということになるわけですが、質が違うメンバーが入るとですね、まっ喧嘩も多少はしますが、長続きするだけではなくて、深く掘り下げることもできるし、それから違う角度からぱっと出されるとですね、自分達で見てこんなもんだと思っていたもんが、例えば今日の松井先生のお話なんか

聞くと非常にもういっぺん深められてくる。そして小町先生が最後に起承転結をですね、あんな形で出されると、おー、なるほどなという形になって、このいわば質の違う人でしかも内容がそれぞれの専門を持った人が集まるっていうのが大変大事だ。

それから研究者ばかりじゃございませんで今日この最初に見せたのは、実は新潟大学の学生さんと私が今勤めております関西大学の学生にですね映像を見せて、ずーとカードに落として、彼らがいったいどういう場面ですごいあれを受けるかという所をとったわけですね。そうすると大学生のセンスっていうのが非常に僕らもびっくりするようなところを指摘してきました。例えばあの、前野さんが非常に苦労して作られたあの、お腹に11匹おると、それは確かにすごいと言いましたけども、彼らが言ったのはひとつは、水槽の下から映す手法と、それからもうひとつは、紫陽花の花をパッと入れたと、これは雨の日というのを紫陽花で象徴しておると、一種の遊びのようだけど、あそこでフッとなんか和むような形がして、そして晴れの日っていうのは電車のところでなんか空の雲を軽く映すようなものだけでも、言葉の裏にきちっとそういうものを映像に入れているってところが大変彼らに指摘されて、僕は紫陽花の花をすっかり見過ごしておったわけですが、そんなことなんかは彼らに教わったと。調査問題の項目についても、こちらが作ったものをチェックしてもらうだけでなく、彼らにいっぺん作らせてみると、稚拙ではあるけれども、どういう問題をしてくるかを基にして、新潟大学の学生さんのものを基にして、あるいは関西大学の学生のものを基にして、僕らがまた検討したと。そういう意味ではチームの中にはそういう若い二十歳前後のセンスも入れているということで、これからの研究としてはこういう異質のメンバーの中には若い方々の素晴らしい発想も入れ込みながらやらなきゃいけないな。

それから研究というものは継続してかなきゃいけないんで、ぶつ切りではだめで前の物とど

んなふうに違えて続けていくかということも、当然のことながら大事なことだというふうに思っています。

ただ、最後に私が深くお礼を申し上げたいのはそういうふうに異質なメンバーが集まってやるためにはコアになる人がいるんですね。バラバラに集まれと言われたってどうせ僕らは集まりゃせんのですが、核になってまとめ、そして貴重な資金を出していただいたりそれから自分自身往復してやってくださったのは生田さんでありまして、私もこの新潟大学に何回来たかあまり数は覚えておりませんが、木原さんはその倍ぐらい来ておりますし、生田さんはそのお返しに、常に大阪まで飛行機で飛んできてくれるということでだいたい土曜か日曜日、関西大学のボロくさい官舎のプレハブの研究室で、研究室でもないようなところで生田さんをお招きして、そこで検討するってなことをやって、生田さんが核になってくれたことが、やっぱり他の人が集まってですね、研究できるということになったわけで、誰かやっぱり核はいるということ、しかし核の人一人だけでは走れないわけで、どういう風なそれをバックアップするようなものができるか、それも異質なメンバーでどうやってやれるか、それも継続していく、続けていくという研究をどうやってやるか、こんなことが大変大事なことになるのではないかと思います。ここに居られる若い学生諸君とか、あるいは若い研究者の方も今日のような違う質のメンバーが同じテーマについて角度を違えて切り込むことの良さと、あるいは難しさというものを少しは分かっていただけかもしれません。時間まいりましたのでこれで終わりにしたいと思っております。ちょっと予定時間の私の不始末で伸びてしまったことを心からお詫びしたいと存じます。どうもありがとうございました。(完)

## ＜参考文献＞

- 生田孝至・松井仁・井上光洋 1996 多次元尺度法による視聴者の映像認知構造の分析 — 「裸の島」を素材として— 日本教育教育工学会誌 20(3)、151-159
- 生田孝至・水越敏行・木原俊行 1996 映像視聴能力の構成とその発達 (II) 日本教育工学会大12回大会講演論文集 667-668
- 生田孝至、松井仁、井上光洋 1995 多次元尺度構成法による映像構成の分析 — 「裸の島」を素材として— 日本教育工学会第11回大会講演論文集 517-518
- 松井仁 1992 事例Aについての資料 東京大学教育学部心理教育相談室紀要 第14集 51-55.
- 松井仁 1993 Aさんとの面接過程 東京大学教育学部心理教育相談室紀要 第15集 45-64.
- 水越敏行・生田孝至・木原俊行 (1996) 映像視聴能力の構成とその発達 (I) 日本教育工学会大12回大会講演論文集 665-666
- 村瀬孝雄 1996 中学生のこころとからだ (新版) 岩波書店
- 田畑治 1987 松井論文へのコメント (松井仁 著 感音難聴を背負った少年 — 1年間の取りくみを振り返って— 内所収) 東京大学教育学部心理教育相談室紀要 第9集 61-75.
- 本研究は、科学研究費補助金「映像の構成と視聴能力の発達に関する研究」(基盤研究(A)1)(研究代表者 生田孝至 課題番号07308018)による。

## 11. 資料 調査用紙

2. 番組に出てきた人や動物はどういう名前でしたか。また、何をしていましたか。写真と名前、やったことを線で正しくむすんでください。

人や動物の写真

名前

やったこと



・たまきち

・赤ちゃんをなめた



・ポップポ

・土をとってきた



・かよこ

・精子（せいし）をあげた

3. ポップポが土の中に穴をほっていましたね。穴をほることをどうやって覚（おぼ）えたのでしょうか。次の中からもっとも正しいと思うものを一つ選んで番号に○をつけてください。

1. ポップポのお母さんに教えてもらった。
2. 本を読んで分かった。
3. かよこちゃんに教えてもらった。
4. たまきちに教えてもらった。
5. 生まれた時から知っていた。

4. ハムスターの赤ちゃんはポップポの中のどこで育っていましたか。次の中からもっとも正しいと思うものを一つ選んで番号に○をつけてください。

1. 卵子（らんし） 2. 精子（せいし） 3. 子宮（しきゅう）
4. 肺（はい） 5. 精巣（せいそう） 6. 心臓（しんぞう）
7. 卵巣（らんそう）

5. ハムスターの赤ちゃんはなん匹（ひき）うまれましたか？その数を書いてください。  
 (                      匹（ひき）)

6. ハムスターはいつもはひまわりの種などを食べています。ポッポが赤ちゃんを産（う）む前に、かよこちゃんがポッポにすいかを食べさせたのはなぜでしょうか。次の中からもっとも正しいと思うものを一つ選んで番号に○をつけてください。



1. すいかの種を食べさせるため。
2. 水分をたくさん取る必要があるから。
3. ポッポはもともとすいかが大好きだったから。
4. かよこちゃんがすいかが大好きだから、いつも冷ぞう庫にいてあるので。
5. ポッポがすいかを食べることができるか試してみるため。
6. ちょうどこの季節（きせつ）の食べものだから。
7. ポッポは赤い色の食べ物が好きだから。

7. ハムスターの赤ちゃんは、人間の赤ちゃんと比べるとどこが違うと思いますか。次の中から正しいものをすべて選んで、番号を下の（ ）に書いてください。

1. 一度にたくさんの赤ちゃんが生まれる。
2. 赤ちゃんは生まれてすぐに歩ける。
3. おすとめすの違いがない。
4. 泣き声をあげない。
5. おっぱいを飲（の）まなくても大きくなる。
6. 生まれたときはピンクですきとおっているが、しばらくしたら黒や茶や白の毛がはえてくる。
7. 大きさや重さがぜんぜん違う。

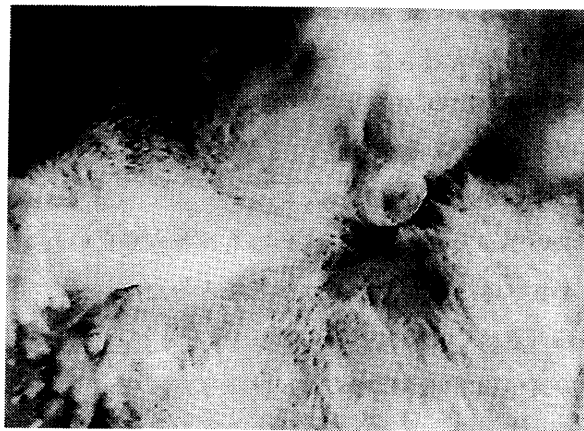
(                      )

8. ハムスターに一番近いのものを次の中から選んで番号に○をつけてください。

( 1. かえる   2. ねずみ   3. めだか   4. いぬ   5. りす )

9. 次の写真はどちらも番組のある場面です。上の場面は、番組を見る人に下の場面の様子がよく分かるようにと、番組を作った人が工夫（くふう）して撮影（さつえい）したものです。

さて、上の場面は下の場面のどこから撮影（さつえい）したものでしょうか。1～4のうち、もっとも正しいと思うものを一つ選んで、番号に○をつけてください。



1  
↓



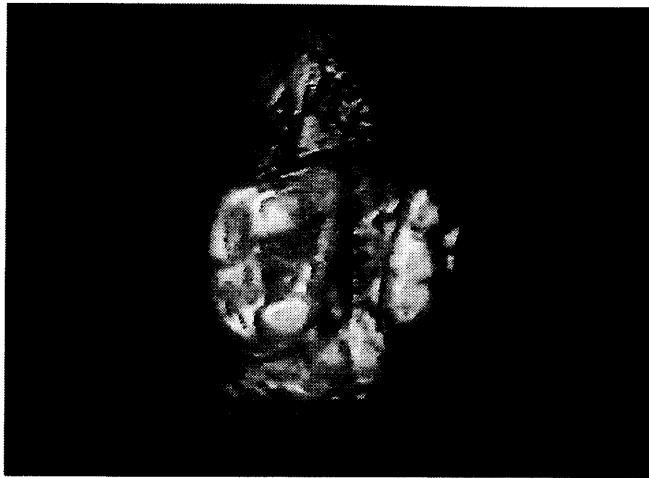
4 →

← 2

↑  
3

10. 次の写真は番組のある場面です。この場面には何が映（うつ）っているのでしょうか。  
次の中からもっとも正しいと思うものを一つ選んで、番号に○をつけてください。

1. ハムスターのもけい。
2. 番組を作った人が考えた夢（ゆめ）の動物。
3. ポッポのお腹。
4. かよこちゃんのかいたハムスターの絵。
5. ひとの脳。



11. 番組の中であじさいの花が出てきましたね。あれは何のために映(うつ)したのでしょうか。次の中からあなたの考えに一番近いものを選んで番号に○をつけてください。

1. 季節(きせつ)が秋のころで、雨がふっていることを表すため。
2. あじさいは植える土によって、色が違ってくことを表すため。
3. 見る人の心をゆったりとさせるため。
4. 一度、番組の流れを止めるため。
5. かよこちゃん、あじさいの花を育てていることを示すため。
6. 時間がすぎるのを表すため。
7. 植物はどうやって子どもをふやすのかを考えるヒントとして。



12. 下級生にこの番組を紹介することにします。大事な場面を見せるとしたら、どこの場面がいいでしょうか。次の中からふたつだけ選んで、番号に○印をつけてください。



1. 土を入れてやったらすぐに穴をほりだしたところ。



2. オスとメスとの交尾のようす。



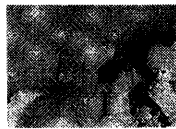
3. たくさんの赤ちゃんができているようす。



4. 赤ちゃん誕生（たんじょう）のしゅんかん。



5. 赤ちゃんの体についているものを母親がなめて食べてしまうところ。



6. 赤ちゃんがあくびをしたらもう歯がはえていたところ。



7. 動物のお医者さんがポッポを診さつしたところ。

[illegible]

1. 前は動物を飼(か)っていた。—— どんな動物ですか ( )
2. いま動物を飼(か)っている。—— どんな動物ですか ( )
3. 動物を飼(か)ったことはない。

( はい : いいえ )

1. ハムスターを飼（か）う人のグループがある。
2. 交尾をして子どもをつくる。
3. 土の中に住む。
4. すいかを食べる。
5. お見合をして16日ぐらいで子どもが生まれる。
6. 親が産んだ子どもをなめる。
7. ハムスターを診さつする医者さんがいる。
8. その他（